

第九六条 傷寒五六日中風、往来寒熱、胸脇苦滿、默々不欲飲食、

心煩喜嘔、或胸中煩而不嘔、或渴、或腹中痛、或脇下痞

鞭、或心下悸、小便不利、或不渴、身有微熱、或欬者、

小柴胡湯主之。

傷寒
五六日
中風

邪結少陽
半表半裏
枢機不利

主証

往来寒熱

邪正相争
一進一退

胸脇苦滿

邪結脇下

默々氣鬱

肝鬱氣滯

不欲飲食

肝脾不和

心煩喜嘔

湿熱上擾

胸中煩・不嘔

湿熱擾心

渴

熱傷胃津

腹中痛

肝脾不和

胸下痞硬

氣結生痰

心下悸

水氣凌心

小便不利

水氣内停

不渴・微熱

表邪殘存

咳

肺失宣降

客証

和解少陽

疎肝解鬱

小柴胡湯

小柴胡湯の証

*

方意

少陽病半表半裏の邪熱を透表し
清熱して和解する主方である。

また少陽は表にも裏にも通じ三陽
の枢の働きを担っている。本方は
少陽の枢機を調整する。

主証

往来寒熱、胸脇苦満、食欲不振
心煩嘔気、口苦目眩。

客証

口渴、咳嗽、動悸、小便不利、
腹痛、黄疸など。

主証が一つでもあれば用いて良い。



小柴胡湯(傷寒・金匱)

- 君薬 柴胡 7.0グラム：苦微寒。少陽の半表の熱を清し、肝鬱気滞を治す。
- 臣薬 黄芩 3.0グラム：苦寒。少陽の半裏の熱を清す。柴胡と協同して少陽病半表半裏の邪熱を散ずる。
- 佐薬 半夏 5.0グラム：辛温、有毒。逆氣を降し少陽病に特有の嘔や咳を止める。生姜とは相畏る関係にある
- 人參 3.0グラム：甘温。益氣生津。中焦を守り正氣を扶ける。
- 甘草 2.0グラム：甘平。正氣を補い中を和す。諸薬を調和。
- 使薬 大棗 3.0グラム：甘微温。補氣養血 } 姜棗は相須の関
生姜 1.0グラム：辛温。半夏の毒を制す } 係で健脾輪胃する。

九七条 血弱、氣盡、腠理開、邪氣因入、與正氣相搏、結於脇下。

正邪分争、往来寒熱、休作有時、默々不欲飲食。臟腑相連、其痛必下、邪高痛下、故使嘔也。小柴胡湯主之。服柴胡湯已、渴者属陽明、以法治之。

傷寒

正氣散耗
腠理疏開

外邪侵入
邪結脇下

邪勝則寒
正勝則熱

往来寒熱

邪客少陽
分争脇下

胸脇苦滿

枢機失調
肝脾不和

默々不欲食

臟腑相連

病邪下降
正氣上向

嘔
痛下

少陽和解

小柴胡湯

治癒

若渴

轉属陽明

以法治之
白虎湯

第九八条 得病六七日、脉遲浮弱、惡風寒、手足温、医二三下之、

不能食而脇下滿痛、面目及身黄、頸項強、小便難者、
與柴胡湯、後必下重。本渴飲水而嘔者、柴胡湯不中與
也、食穀者噦。

得病
六七日

脉
弱 遲 浮
惡風寒
手足温
便秘

裏實

表証殘存

誤下

脾虛痰飲
表熱內陷

痰熱
互結

三焦失調
痰熱互結
湿熱停滯

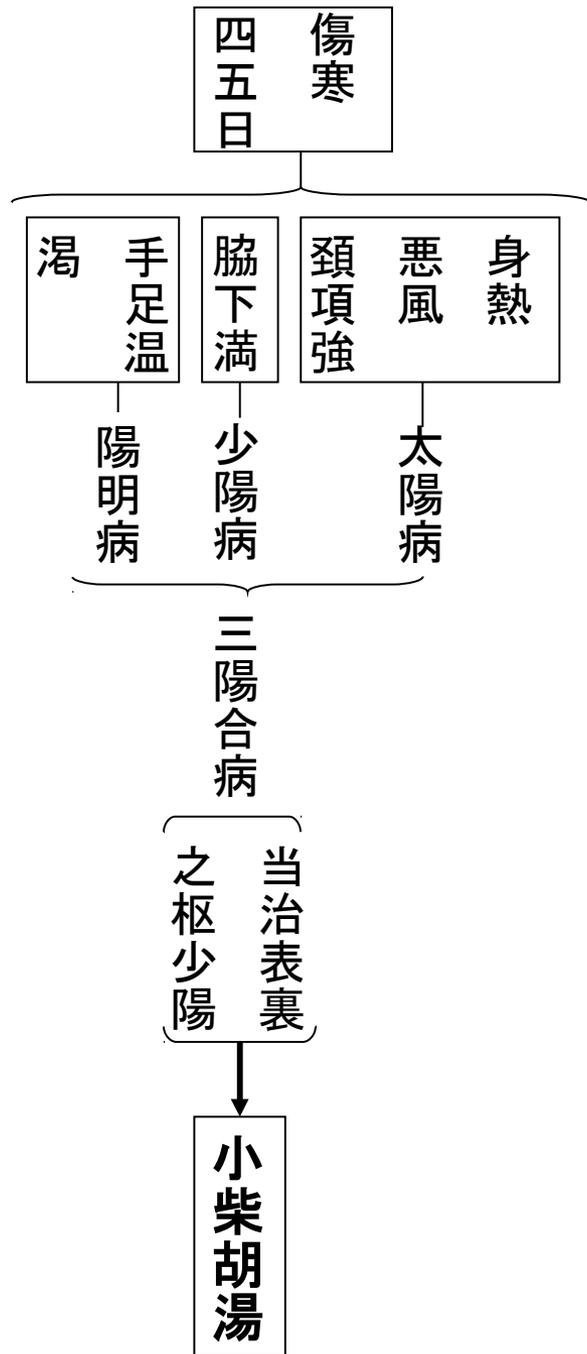
脇下滿痛
不能食
面目身黄
頸項強
小便難

不中柴胡湯

下重
渴嘔
穀噦

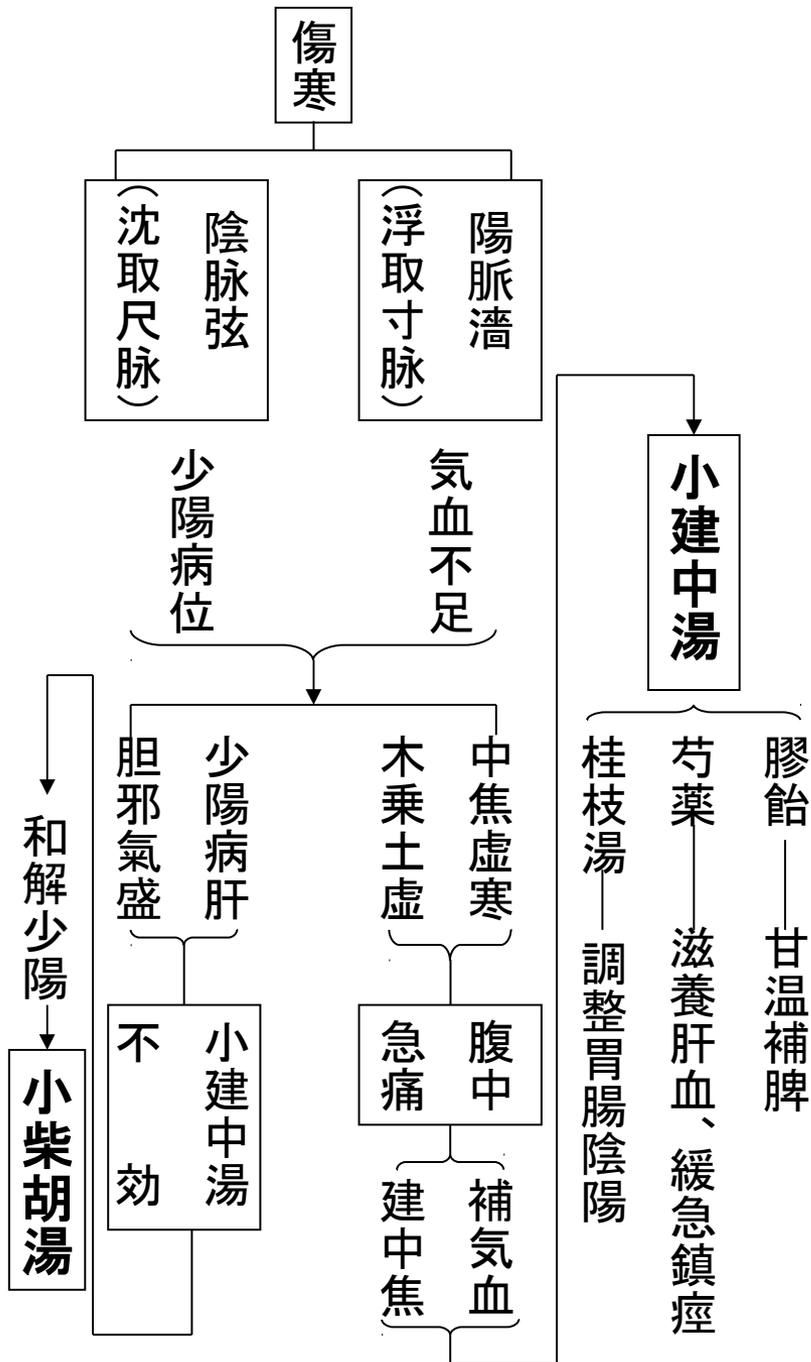
第九九条 傷寒四五日、身熱、惡風、頸項強、脇下滿、手足温而

渴者、小柴胡湯主之。



第一〇〇条 傷寒、陽脈瀉、陰脈弦、法当腹中急痛、先與小建中

湯。不差者、小柴胡湯主之。



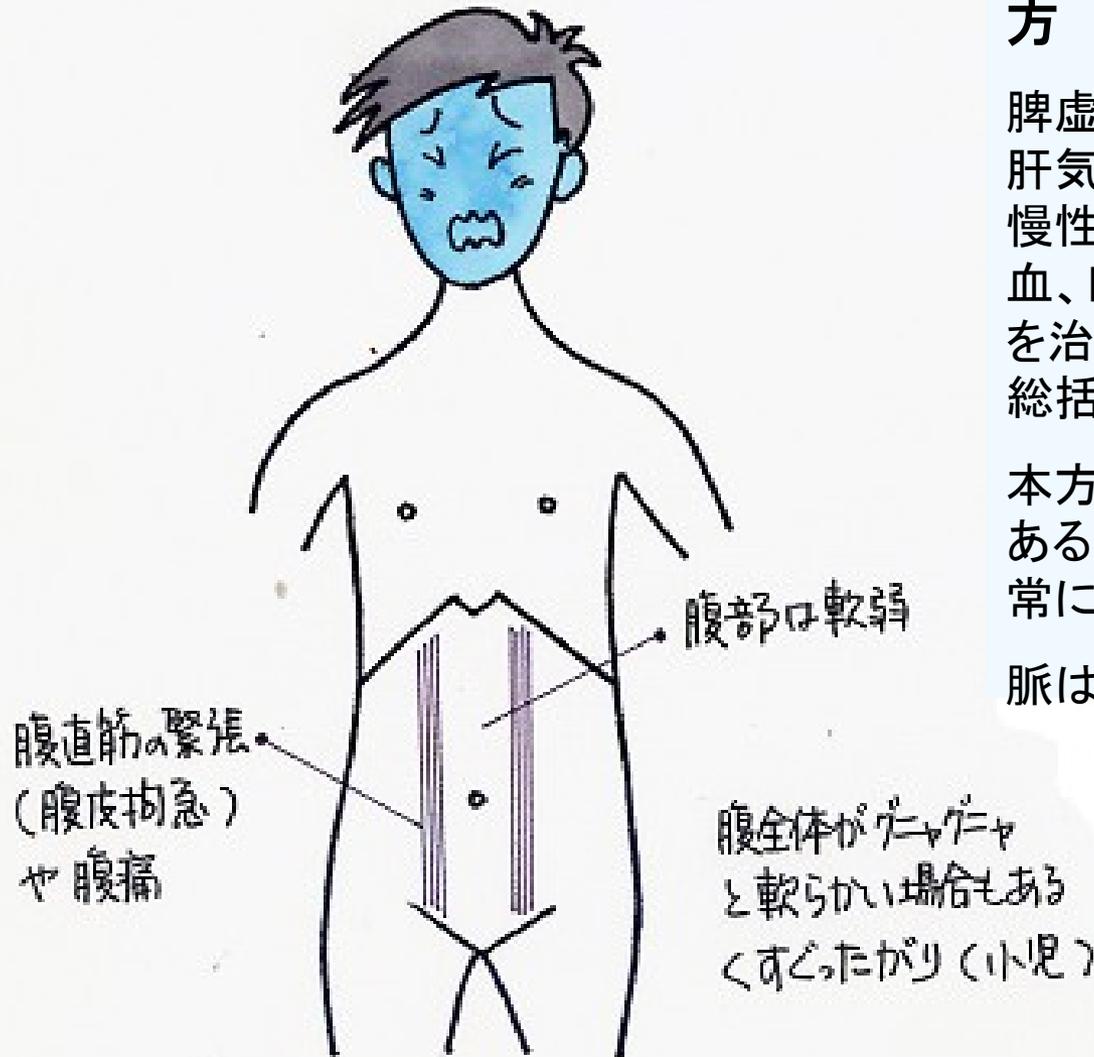
小建中湯の証

方意

脾虚で気血不足し、身体虚弱の人が肝気が脾に過剰に働いて(肝乗脾虚)慢性の腹痛、あるいは動悸、煩熱、衄血、四肢疼痛、遺溺などを生じるものを治す。これらの症状は「虚劳裏急」と総括される。

本方は胃腸虚弱な人の痙攣性腹痛、あるいは虚弱児の体質改善薬として非常に有効である。

脈は弦弱、舌質は淡軟で舌苔は少。



弁証のTrias

- 1) 胃腸虚弱
- 2) 痙攣性腹痛
- 3) 腹皮拘急or腹部軟弱

小建中湯（傷寒・金匱）

君薬：膠 飴 1升(20)甘、温。補脾、芍薬と共に急痛を緩和。

臣薬：甘 草 2両(3.0)甘、平。補心脾。芍薬と組み緩急止痛。

佐薬：白芍薬 6両(6.0)酸苦、微寒。平肝斂陰、急迫を徐す。

肝血の生成を扶けて柔肝し、肝気の横逆を緩和。

桂 枝 3両(4.0)辛甘、温。益気温中、陽氣を温通する。

使薬：生 姜 3両(4.0)辛、温。温胃補脾。桂姜2味で益胃。

大 棗 12枚(4.0)甘、温。姜棗2薬で温胃補脾して中

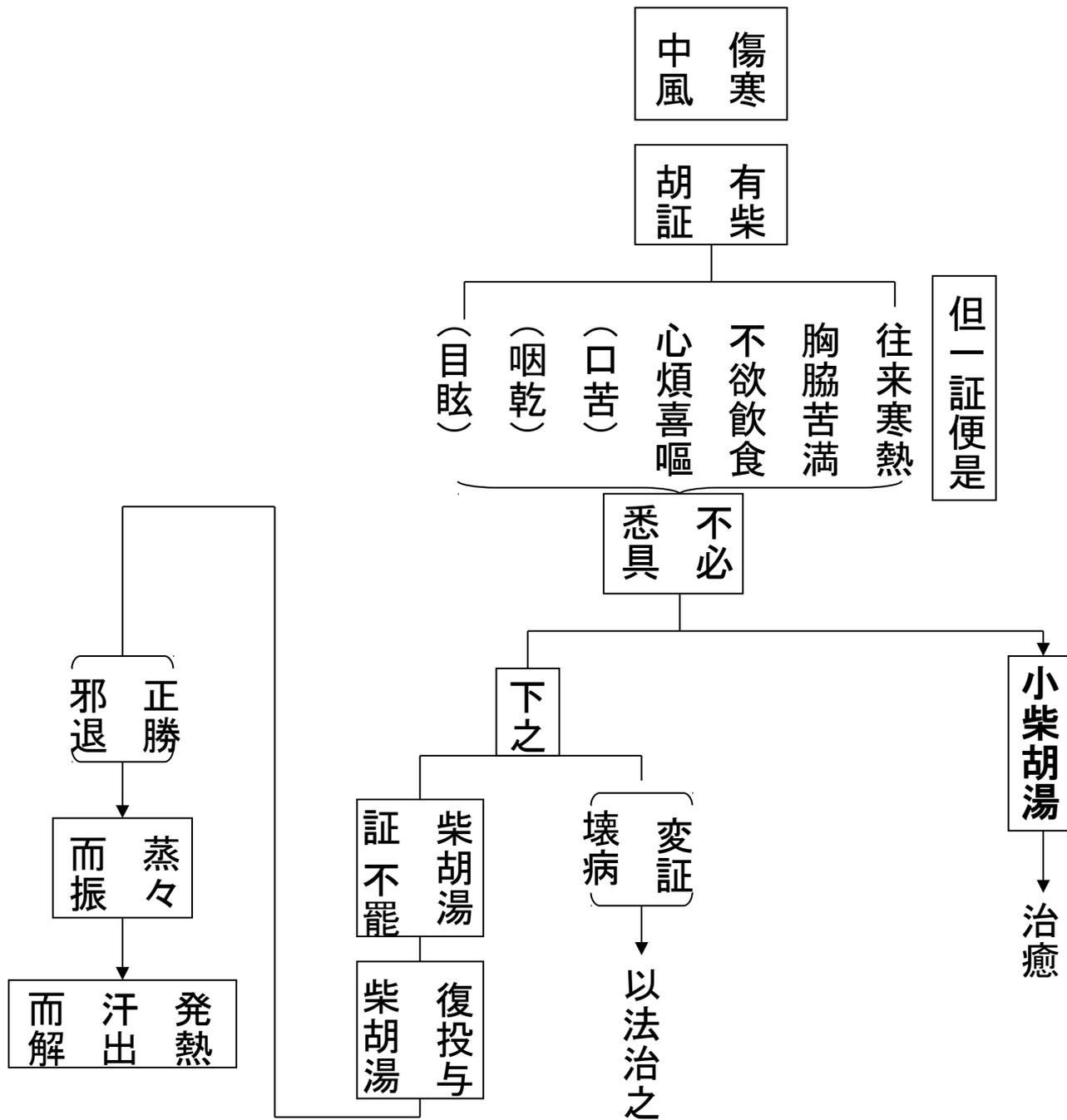
焦の働きを賦活し、津液を行らせ、榮衛を調和。

膠飴、桂枝、甘草、大棗、生姜の辛甘で補陽、芍薬、膠飴、甘

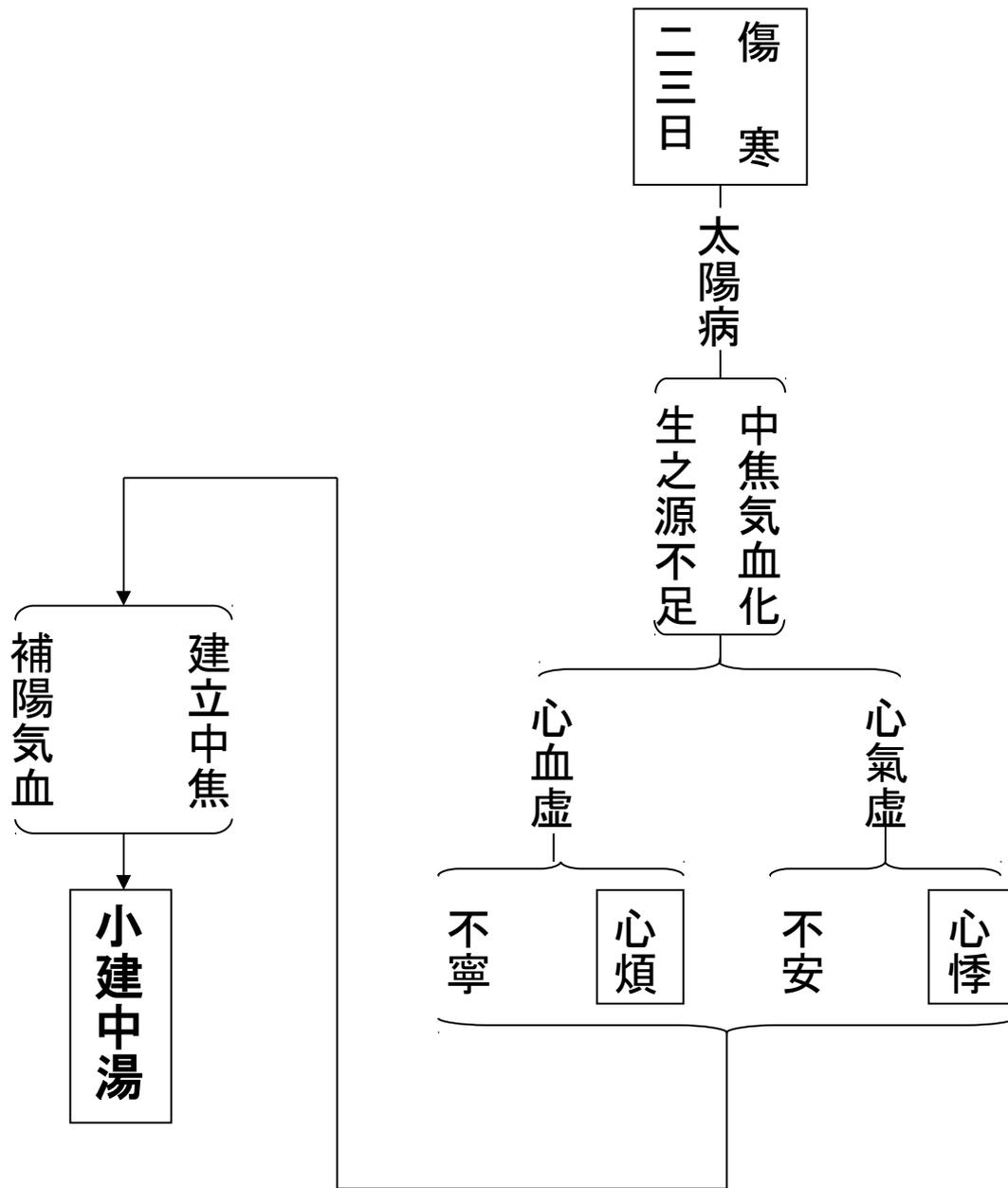
草の酸甘で化陰し、処方全体では温中補虚、和裏緩急の働き。

第一〇一条 傷寒中風、有柴胡証、但見一証便是、不必悉具。

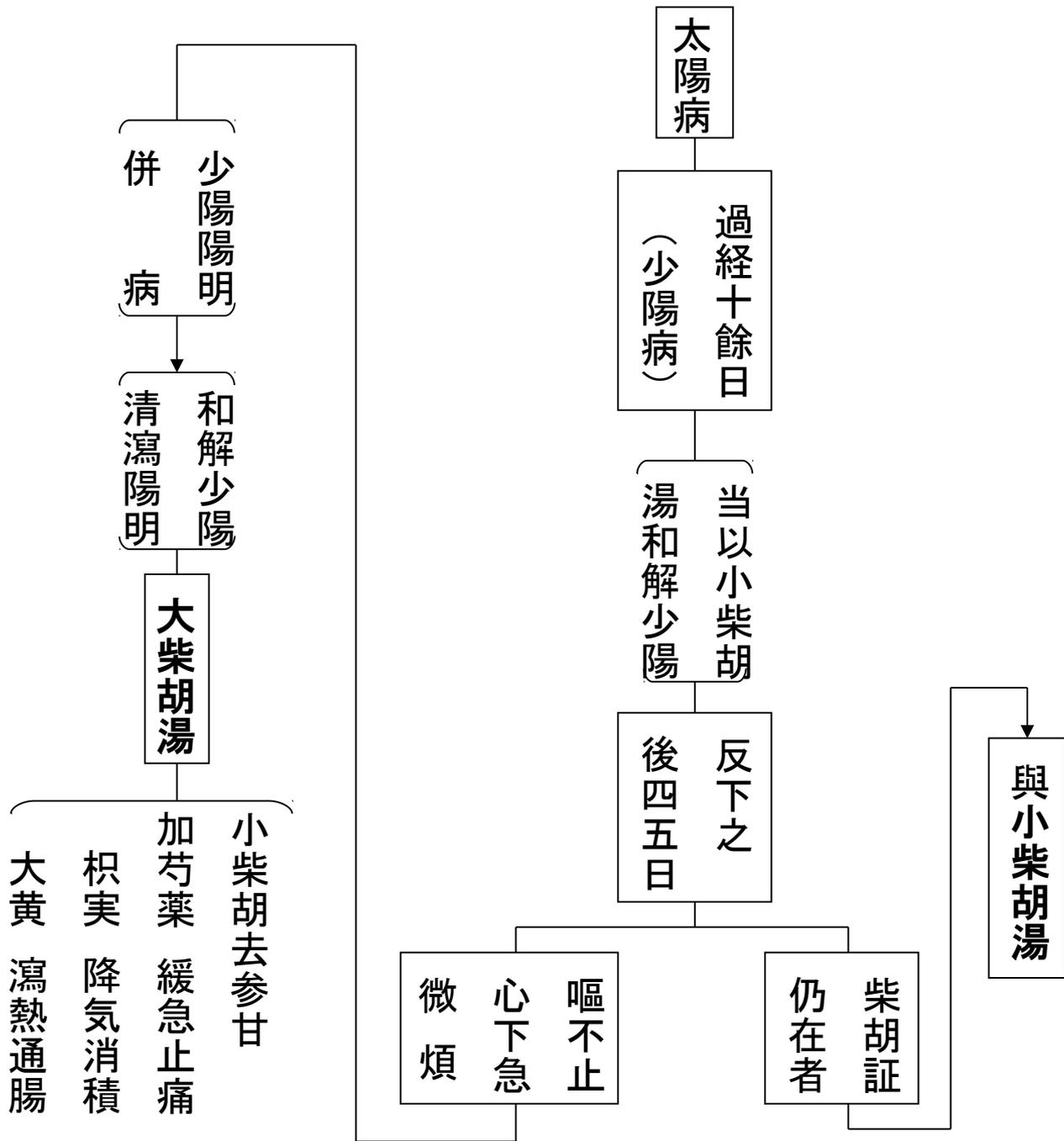
凡柴胡湯病証而下之。若柴胡証不罷者、復與柴胡湯、必蒸蒸而振、却復發熱汗出而解。



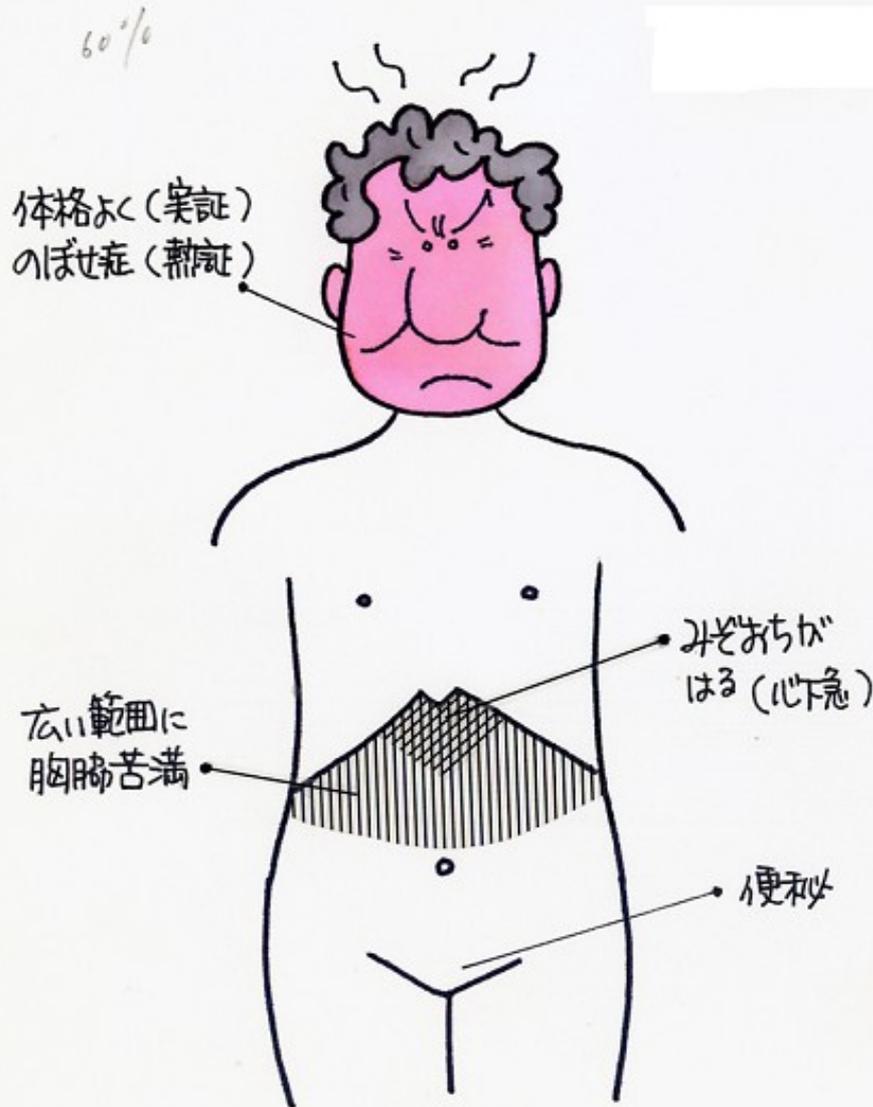
第一〇二条 傷寒二三日、心中悸而煩者、小建中湯主之。



第一〇三条 太陽病、過經十餘日、反二三下之。後四五日、柴胡証仍在者、先與小柴胡湯。嘔不止、心下急、鬱々微煩者、為未解也、與大柴胡湯下之則愈。



大柴胡湯の証*



最も実証向けの柴胡劑
少陽病から陽明病期にかけて
用いる 従って裏熱実証
色浅黒く 筋肉質のがっしりした
体格で 便秘気味の人(実証)
に應用範囲が広い
脈は沈で 緊張よく太い
舌は白や黄色の厚い苔がある
ことが多い。

診断のポイント

- ・ 実証
- ・ 臍から上の緊張
(胸膈苦満+心下急)
- ・ 便秘傾向



第一〇四条 傷寒十三日不解、胸脇滿而嘔、日晡所發潮熱、已

而微利。此本柴胡証、下之以不得利、今反利者、知

医以丸藥下之、此非其治也。潮熱者實也。先宜服

小柴胡湯以解外、後以柴胡加芒硝湯主之。

傷寒

十三日不解

胸脇滿

邪結脇下

少陽病——要和解

嘔

胃氣不和

日晡潮熱

胃腑燥熱——陽明腑實——要清瀉

大柴胡湯

正治

以丸藥

誤下之

便通微利

少陽病未解

陽明胃熱不除

先服小柴胡湯

透表

和裏

補脾

胃中燥

熱殘存

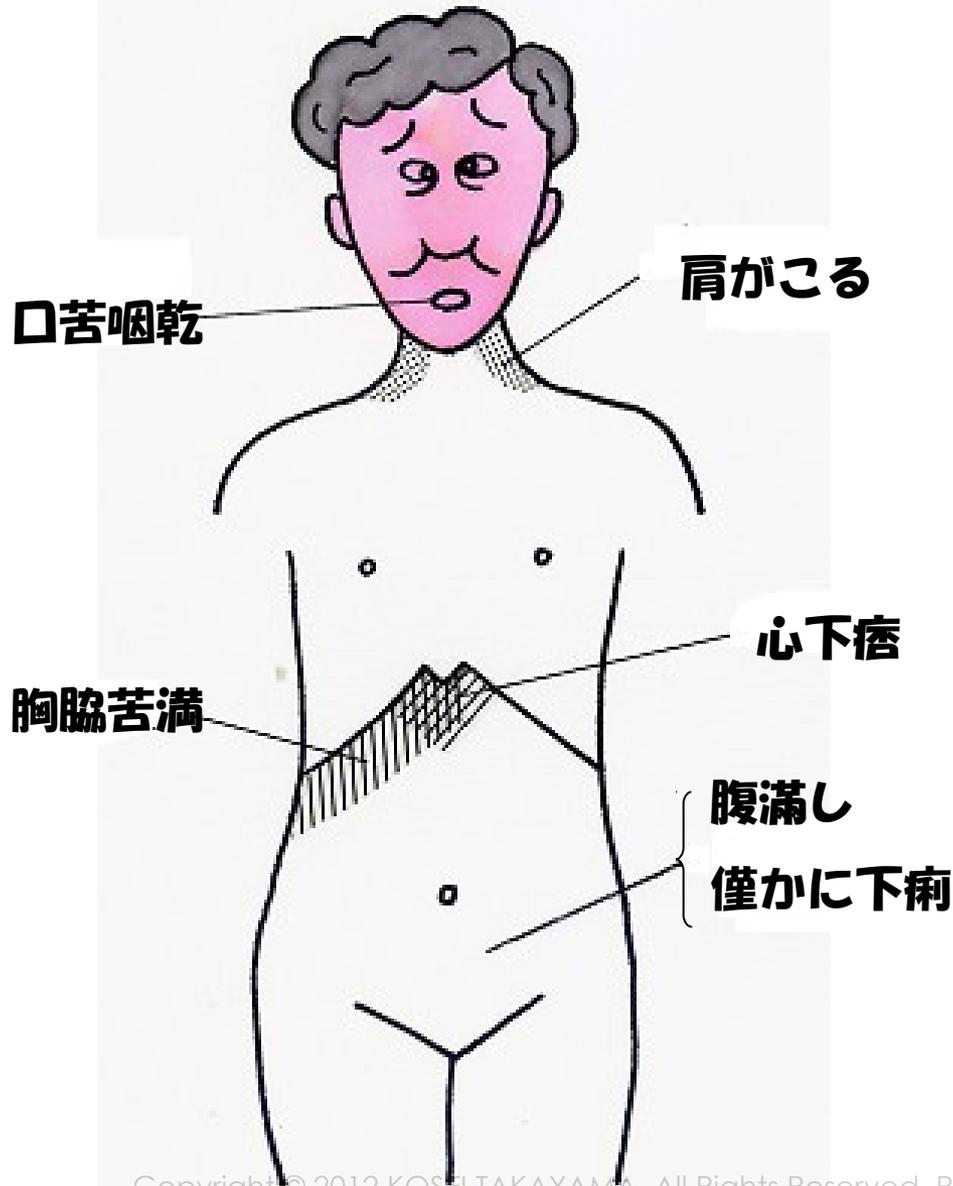
柴胡加芒硝湯

芒硝湯

小柴胡湯(1/3量)和裏

加芒硝——蕩滌裏熱

柴胡加芒硝湯の証



方意

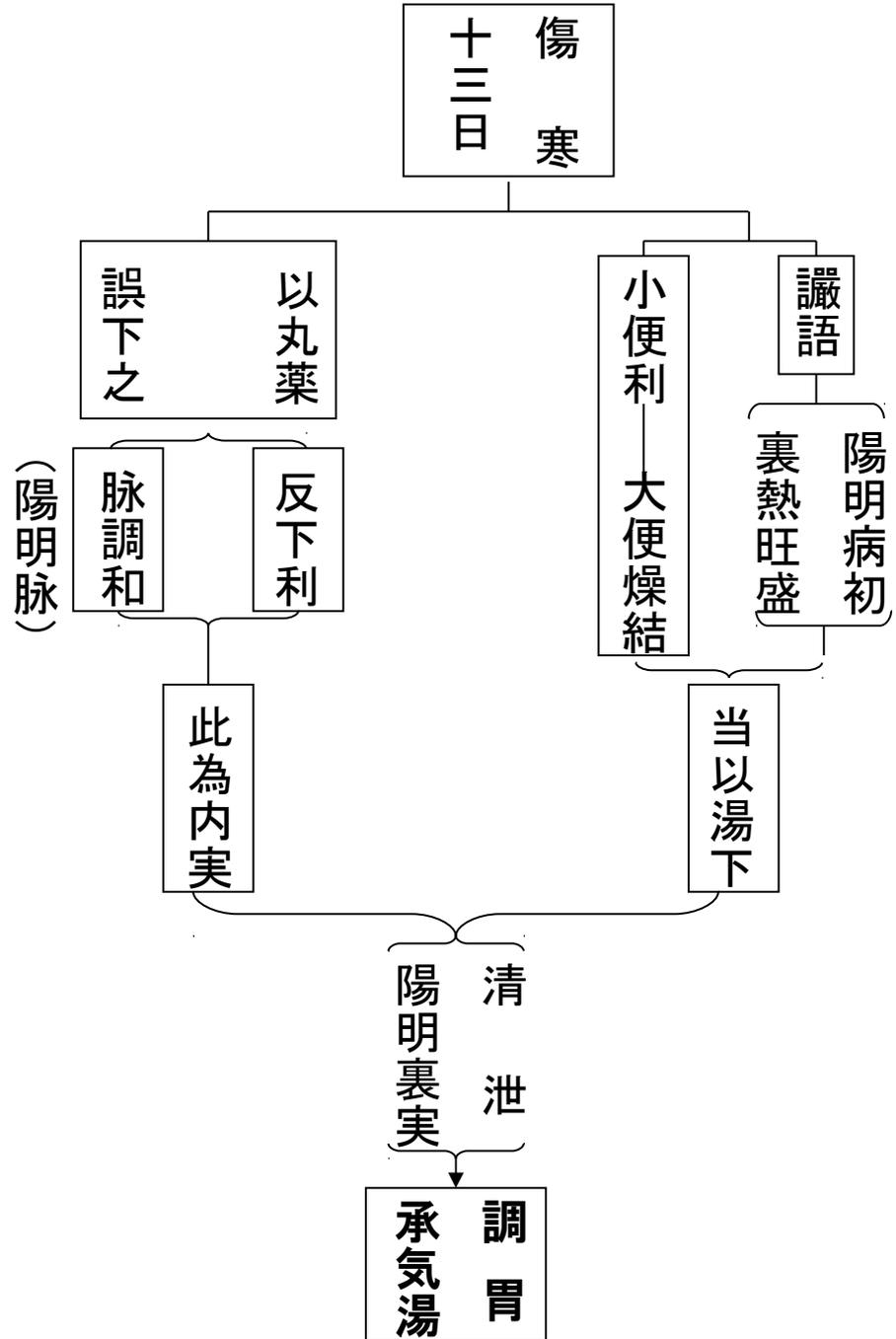
傷寒にかかって13日、病は半表半裏の少陽病からさらに病邪は一部陽明に入り、少陽陽明の併病で大柴胡湯証になったのを寒性の瀉下剤で下した結果、陽明の裏熱が解されず、微かに下痢すると共に胸脇苦満と潮熱を呈す壞病に陥ったものである。

弁証のTrias

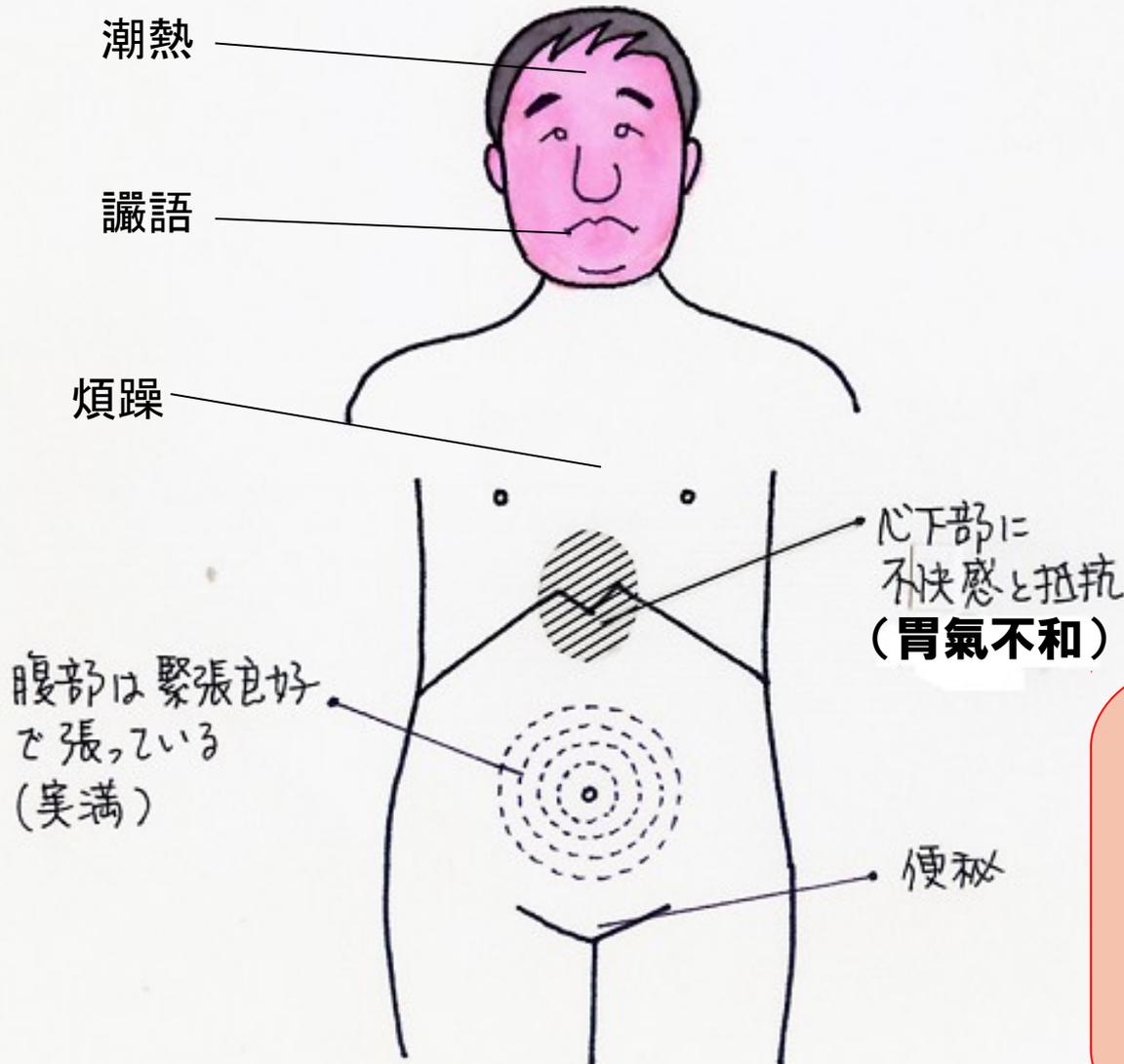
- 1) 胸脇苦満
- 2) 腹満、下痢軟便
- 3) 午後の発熱(潮熱)

第一〇五条 傷寒十三日、經過、讖語者以有熱也、當以湯下之。

若小便利者、大便當鞭、而反下利、脉調和者、知医以丸藥下之、非其治也。若自下利者、脉當微厥、今反和者、此為内實也、調胃承氣湯主之。



調胃承気湯の証



方意

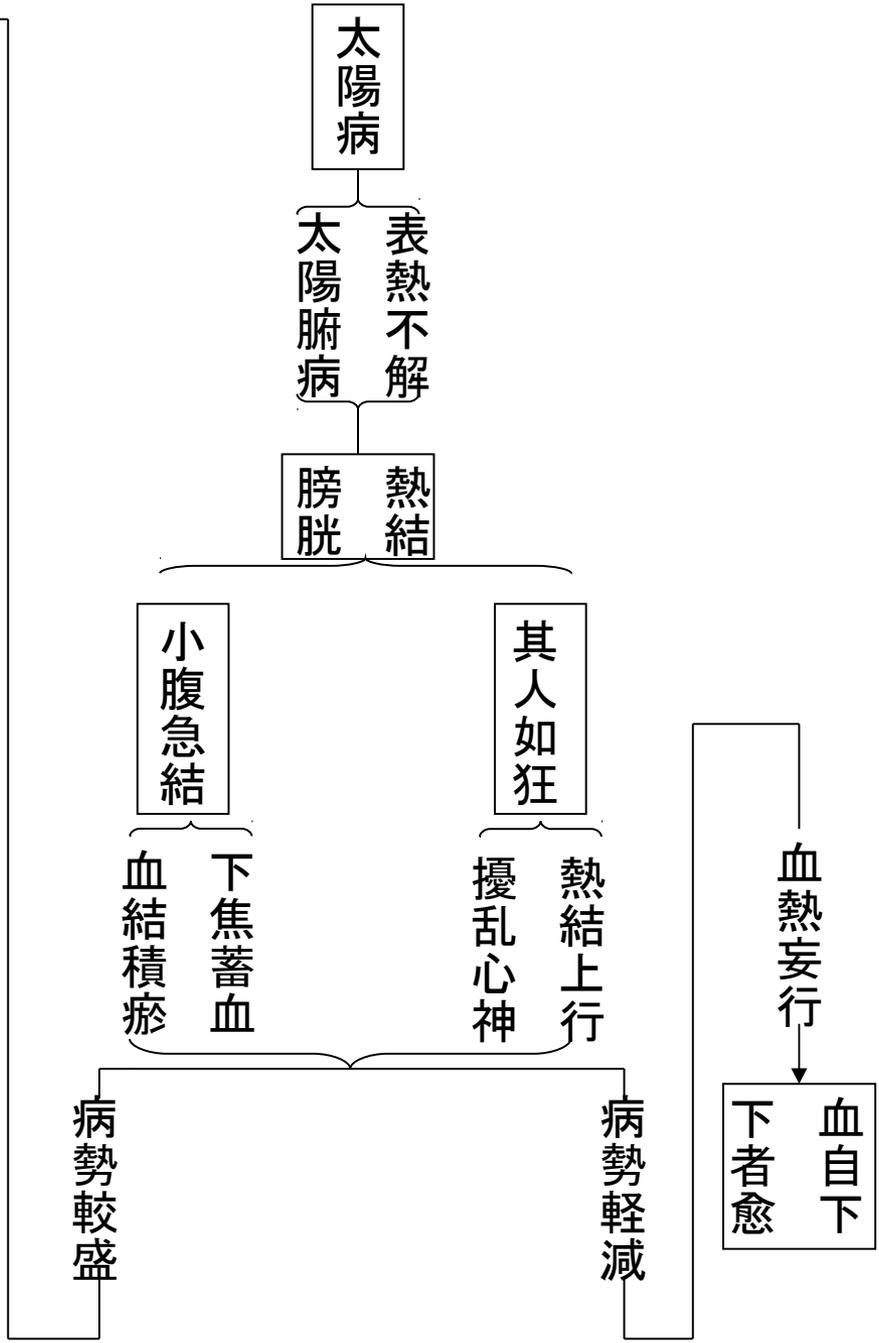
陽明病の代表的方劑である承気湯類の中では最も作用の緩和な薬方である。
順気通便の方劑である。
病位は陽明病 裏熱実証
脈は沈実
舌は乾燥し、厚い黄苔或いは白苔

弁証のTrias

- 1) 腹部実満、便秘
- 2) 胃氣不和
- 3) 時に潮熱、煩躁、讞語

第一〇六条 太陽病不解、熱結膀胱、其人如狂、血自下、下者愈。

其外不解者、尚未可攻、当先解其外。外解已、但少腹急結者、乃可攻之、宜桃核承氣湯。



表裏熱盛

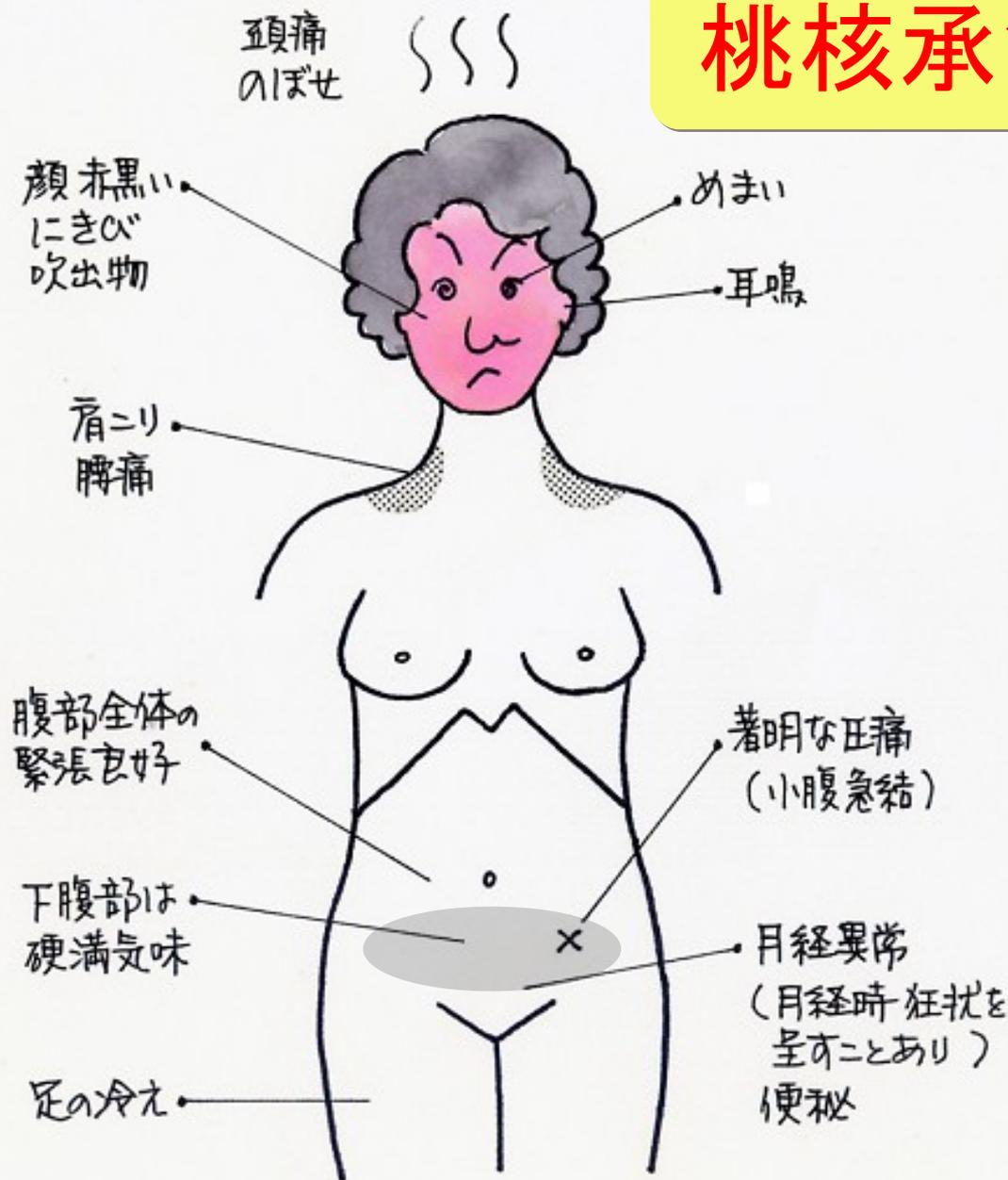
其外不解
尚未可攻

先解表証
後攻瘀血

桃核承氣湯

- 桃仁 破血通絡
- 桂枝 通絡活血
- 大黃 清熱破積
- 芒硝 清熱軟堅
- 甘草 和藥扶正

桃核承気湯の証*



太陽病の表邪が解されず、太陽の腑である膀胱に達し、膀胱の血分と結合して、下焦に実熱性の瘀血を生じた。

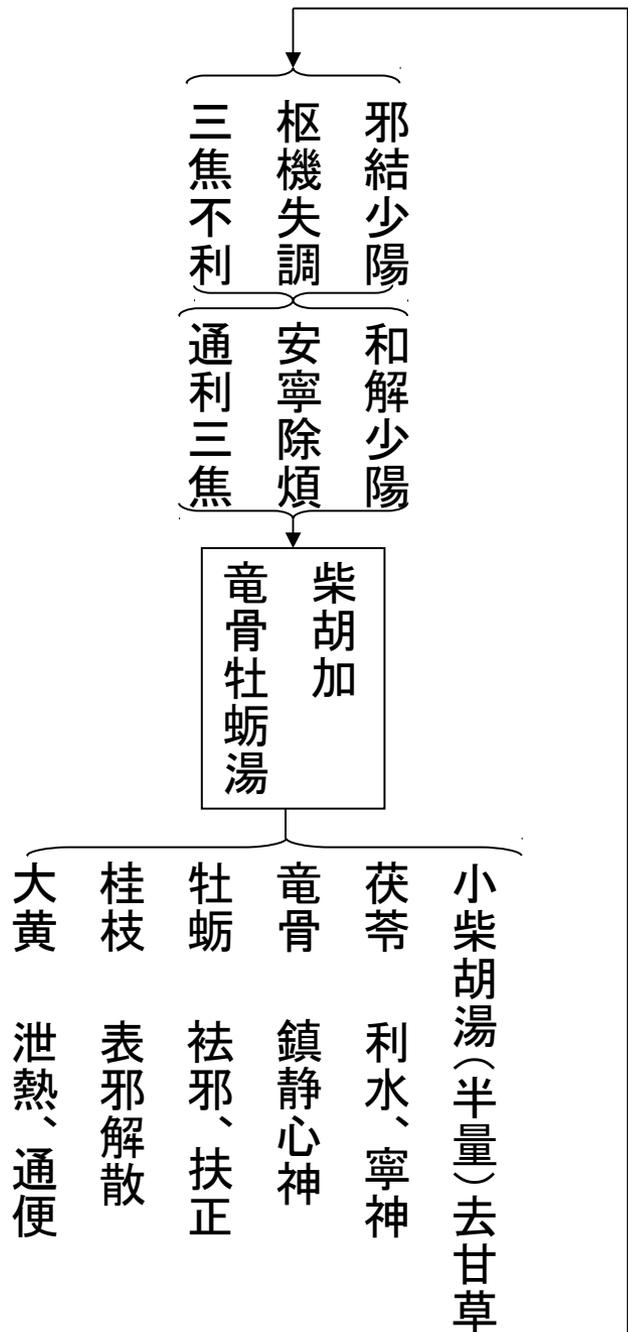
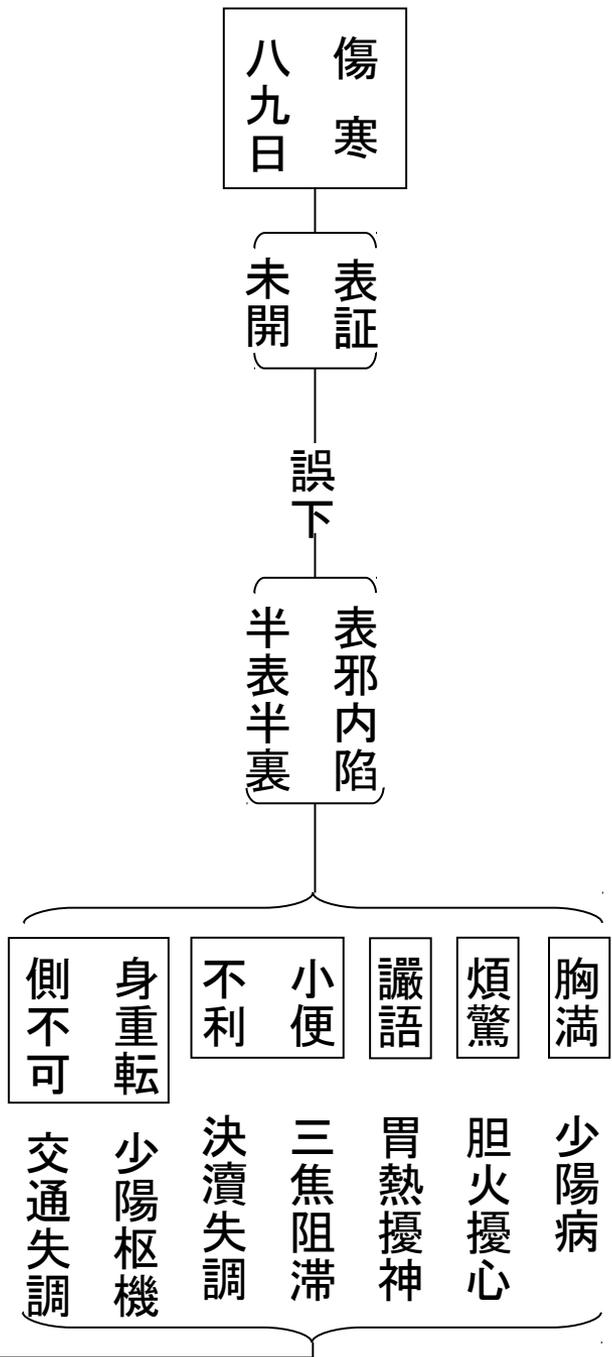
脉沈実、あるいは瀼
舌はやや乾燥、黄苔を伴う。
腹部充満、少腹急結。

診断のポイント

- ・実証で瘀血症状
- ・小腹急結
- ・のぼせと精神不安定



一〇七条 傷寒八九日、下之、胸滿、煩驚、小便不利、讖語、一身盡重、不可轉側者、柴胡加竜骨牡蠣湯主之。



柴胡加竜骨牡蠣湯の証*

不眠
抑うつ
不安

讖語

脈弦時に数
舌紅、白黄苔

心煩、動悸

胸脇苦満

心下痞

著明な搏動
(脘上悸)

腹力は中程度
弾力のある腹壁

尿不利

方意

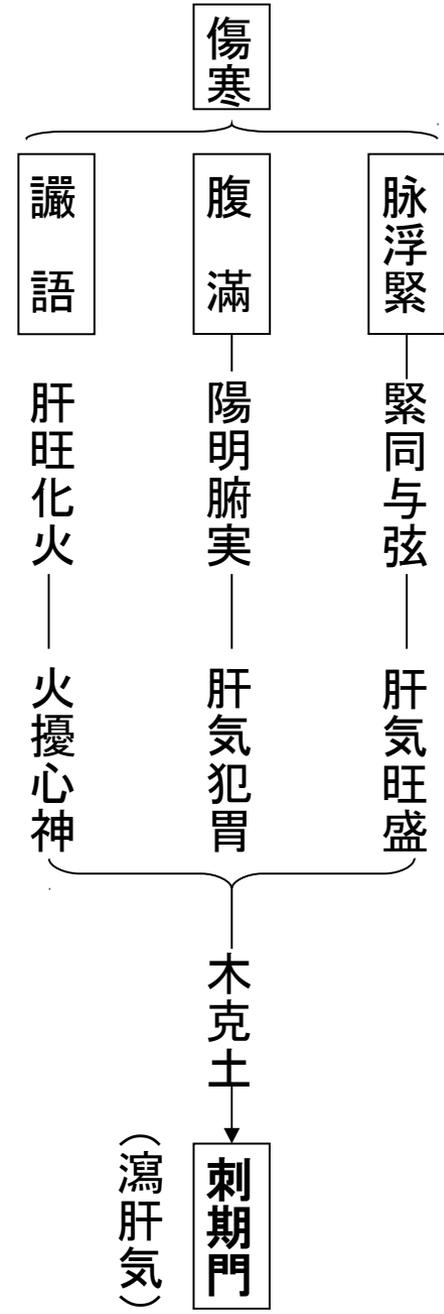
太陽病を誤って下し、表の邪が半表半裏の少陽に内陷し、少陽胆の症状を主証としながら、三焦・心・胃にまで失調が波及して多彩な証候を呈す。少陽の枢機が失調して全身が重倦い。少陽胆の熱に因り心煩。心に上擾驚。少陽病に因る胸満(胸脇苦満)。三焦の失調で小便不利。胃熱に因り讖語。

弁証のTrias

- 1) 胸満(胸脇苦満)
- 2) 煩驚(不安、不眠、)
- 3) 脘上動悸

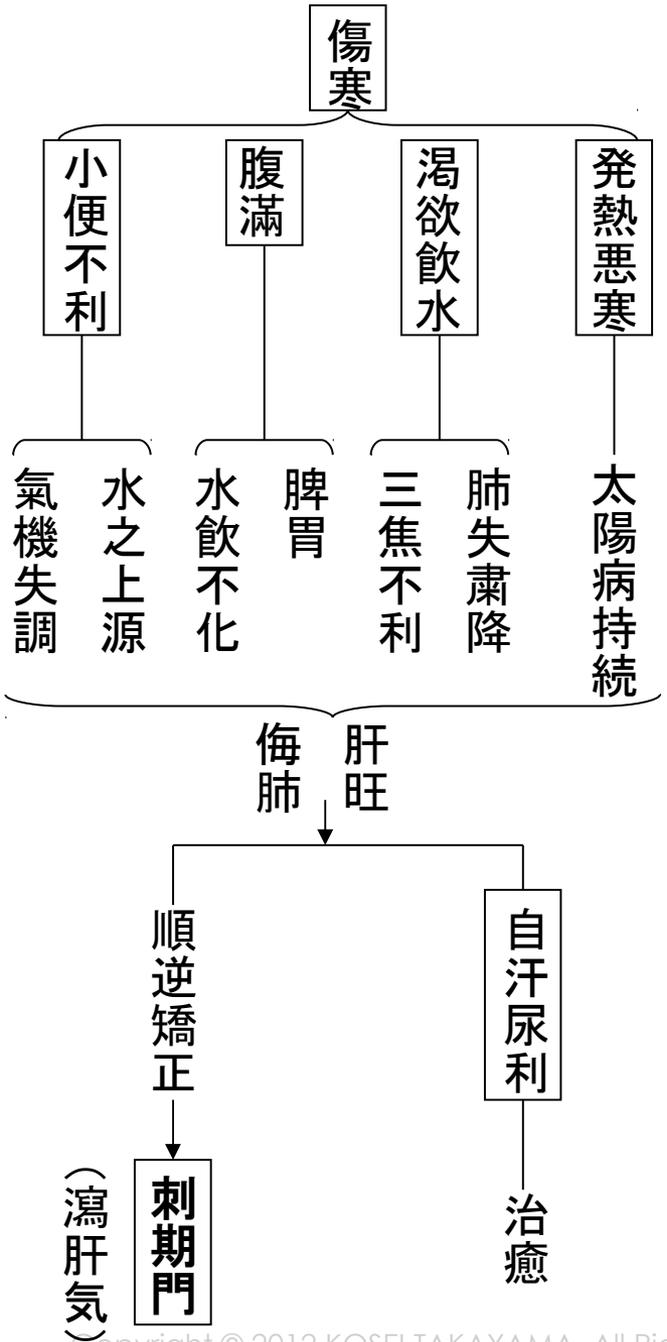
第一〇八条 傷寒、腹滿、讖語、寸口脉浮而緊、此肝乘脾也、名

曰縱、刺期門。



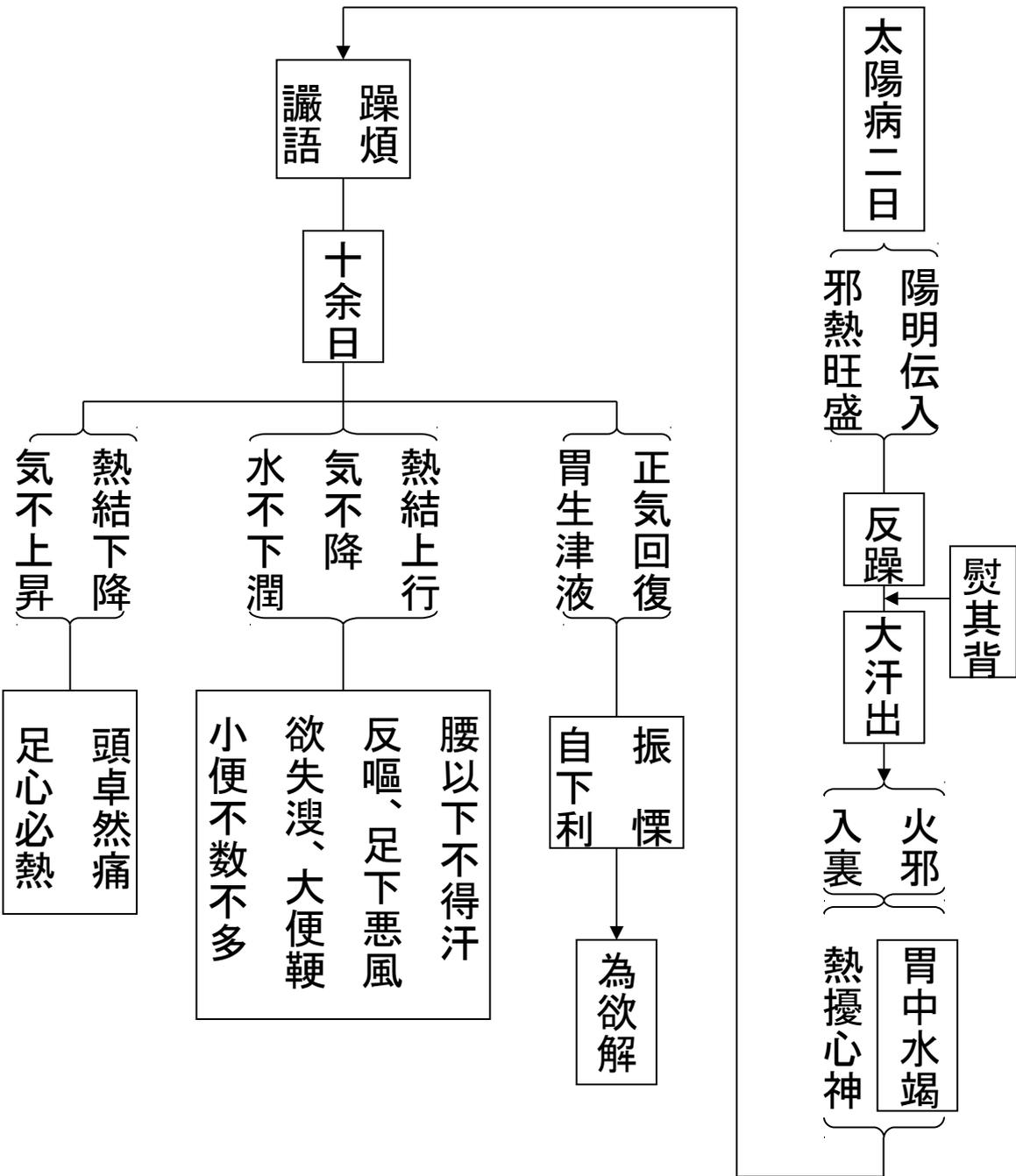
第一〇九条 傷寒發熱、濇濇惡寒、大渴欲飲水、其腹必滿、自汗

出、小便利、其病欲解、此肝乘肺也。名曰橫、刺期門。



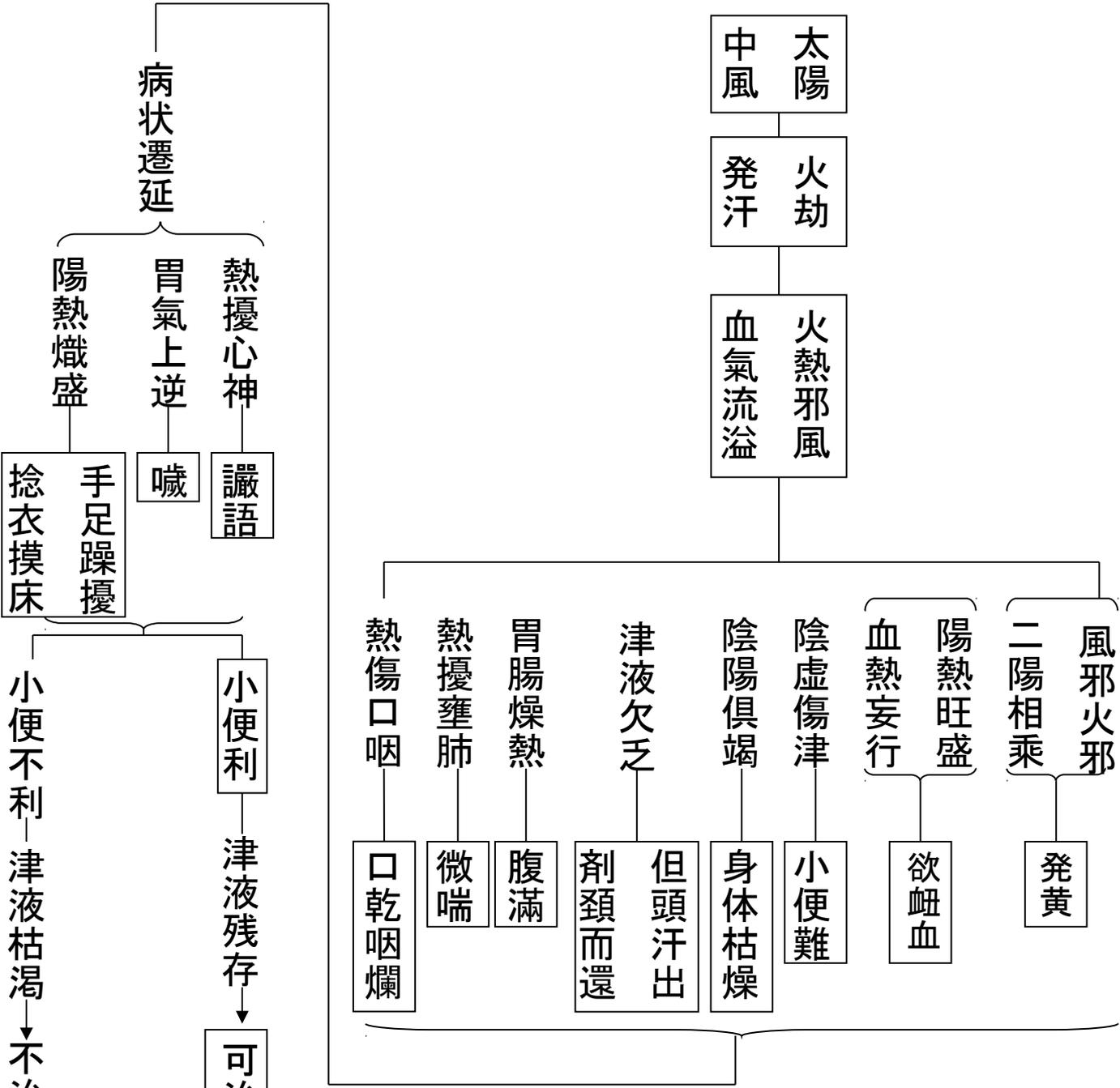
第一一〇条 太陽病二日、反躁、凡熨其背而大汗出、大熱入胃、

胃中水喝、躁煩必發讖語。十余日振慄自下利者、此為欲解也。故其汗從腰以下不得汗、欲小便不得、反嘔、欲失溲、足下惡風、大便鞭、小便當數、而反不數及不多。大便已、頭卓然而痛、其人足心必熱、穀氣下流故也。

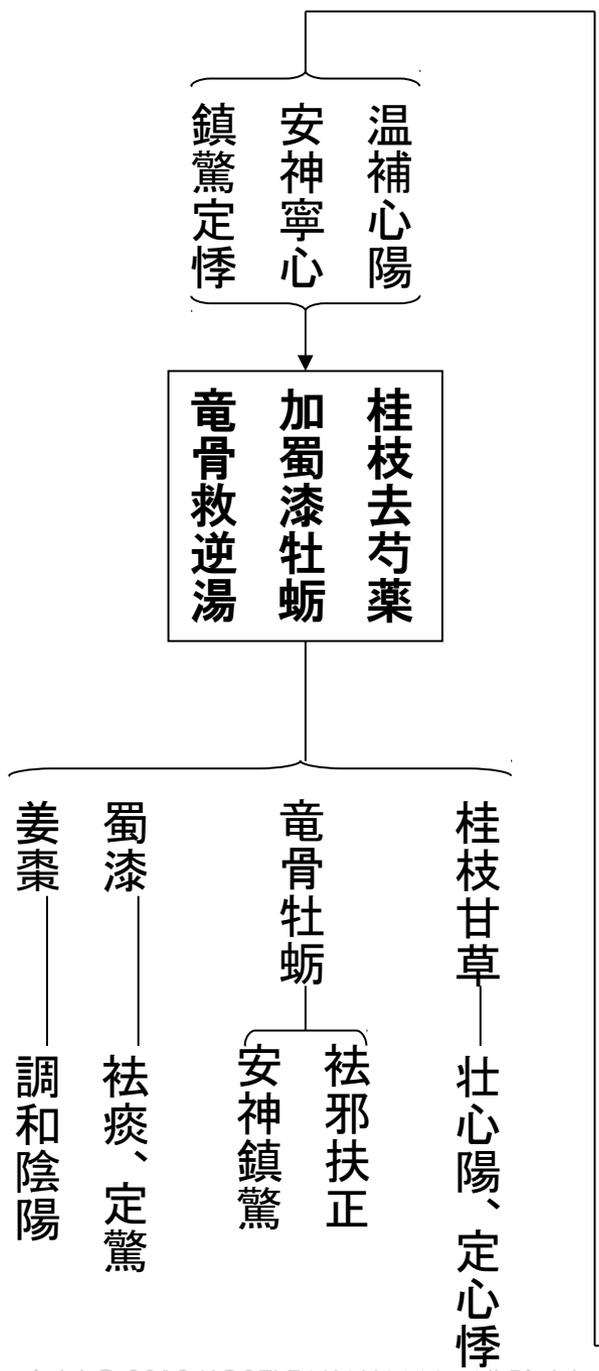
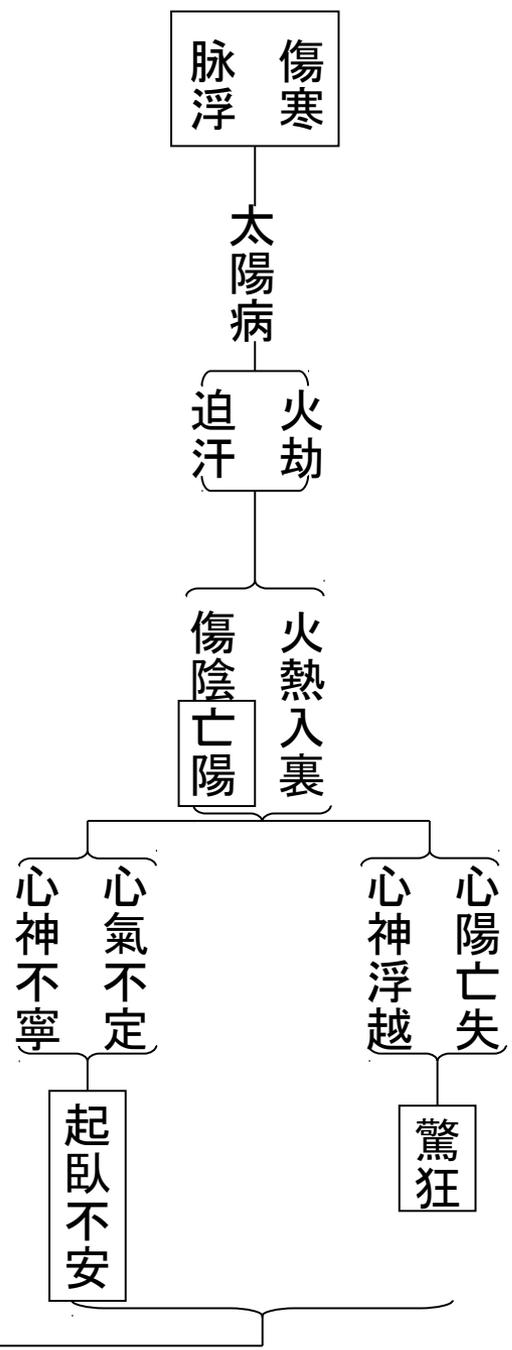


第一一条 太陽病中風、以火劫発汗。邪風被火熱、血氣流溢、

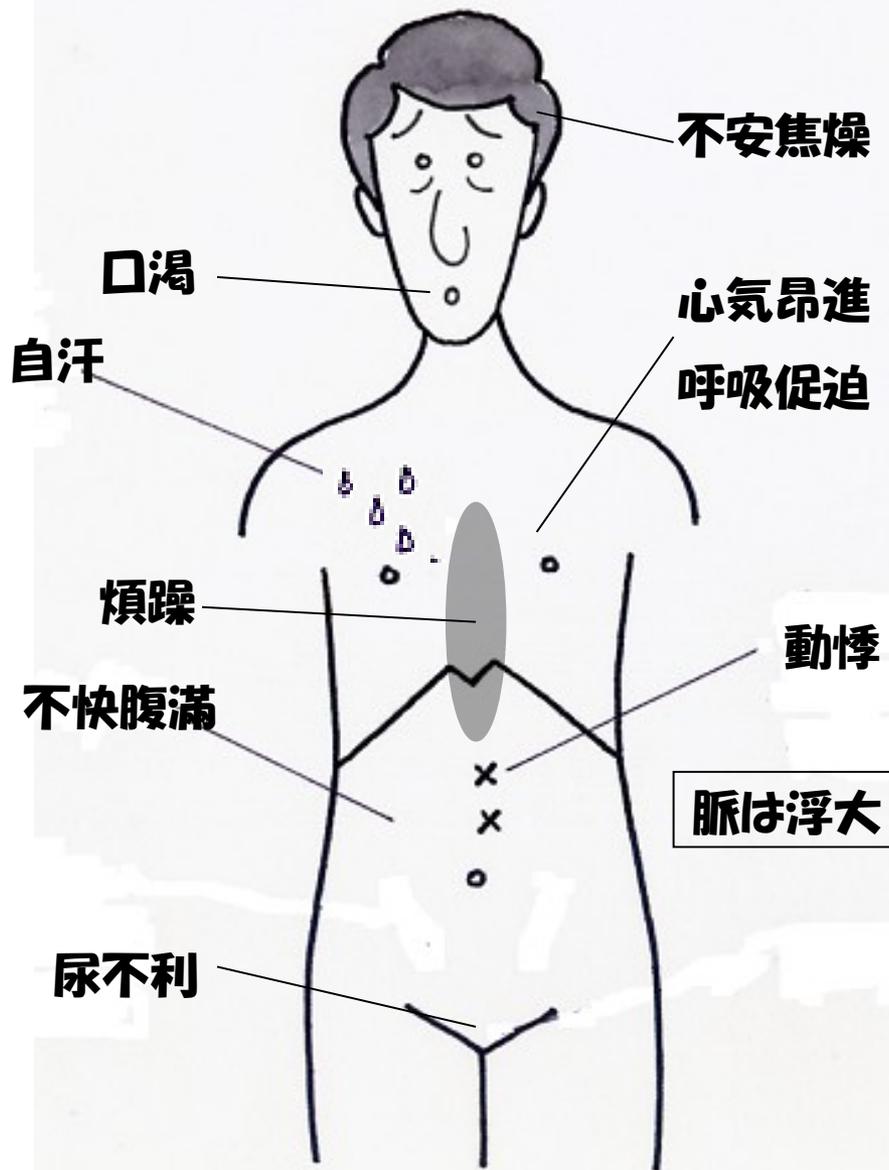
失其常度、両陽相薰灼、其身発黄。陽盛則欲衄、陰虛小便難。陰陽俱虚竭、身体則枯燥、但頭汗出、剂頸還。腹滿、微喘、口乾、咽爛、或不大便、久則讞語、甚者至噦、手足躁擾、捻衣摸床、小便利者、其人可治。



第一一二条 傷寒脉浮、医以火迫劫之、亡陽、必驚狂、臥起不安者、桂枝去芍藥加蜀漆牡蛎竜骨救逆湯主之。



桂枝去芍薬加蜀漆牡蛎竜骨救逆湯の証



方意

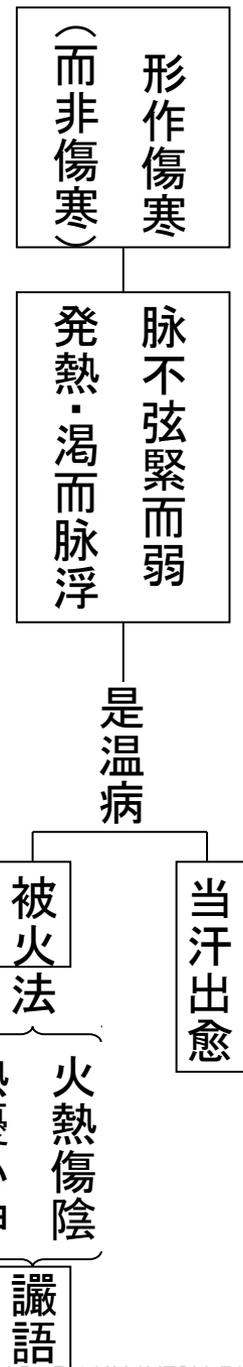
太陽病に火法を用いて強引な発汗を行った結果、大量の発汗に困り心液を亡失して心陽が虚し、動悸、呼吸促迫などの心肺症状に加えて、不安不眠、恐怖焦燥などの精神神経症状が生じたものである。

処方内容は桂枝去芍薬湯に竜骨、牡蛎、蜀漆の3味を加味したもので、心陽回復、栄衛調和、養心安神に働く。

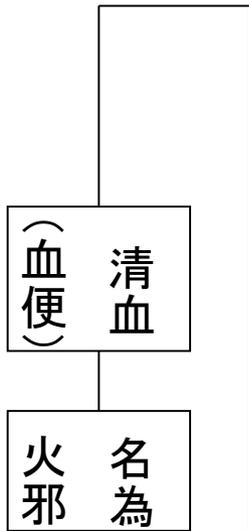
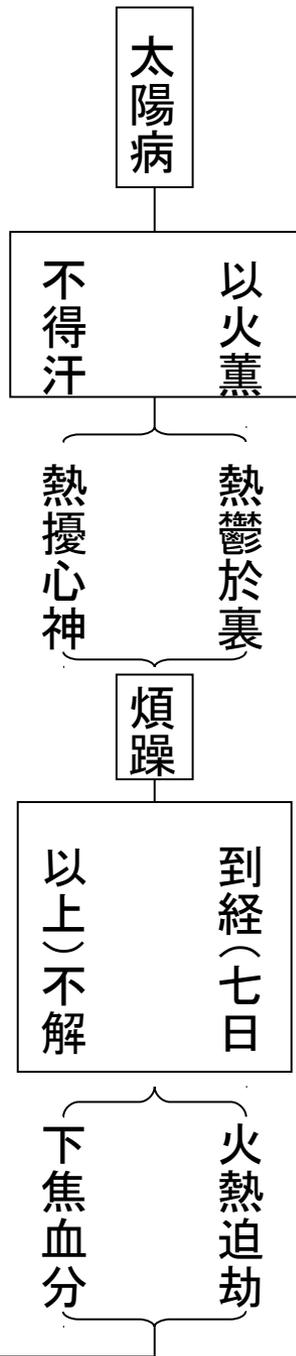
弁証のTrias

- 1) 不安焦燥感、不眠
- 2) 動悸、呼吸促迫
- 3) 煩躁、尿不利

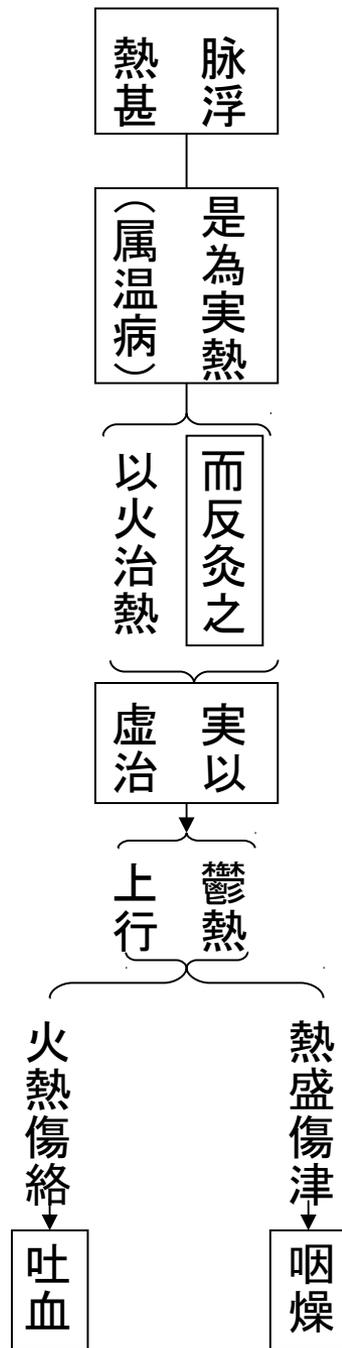
一一三条 形作傷寒、其脉不弦緊而弱。弱者必渴、被火必讖語。
弱者發熱、脉浮、解之当汗出愈。



一一四条 太陽病、以火薰之、不得汗、其人必躁。到經不解、必清血、名為火邪。

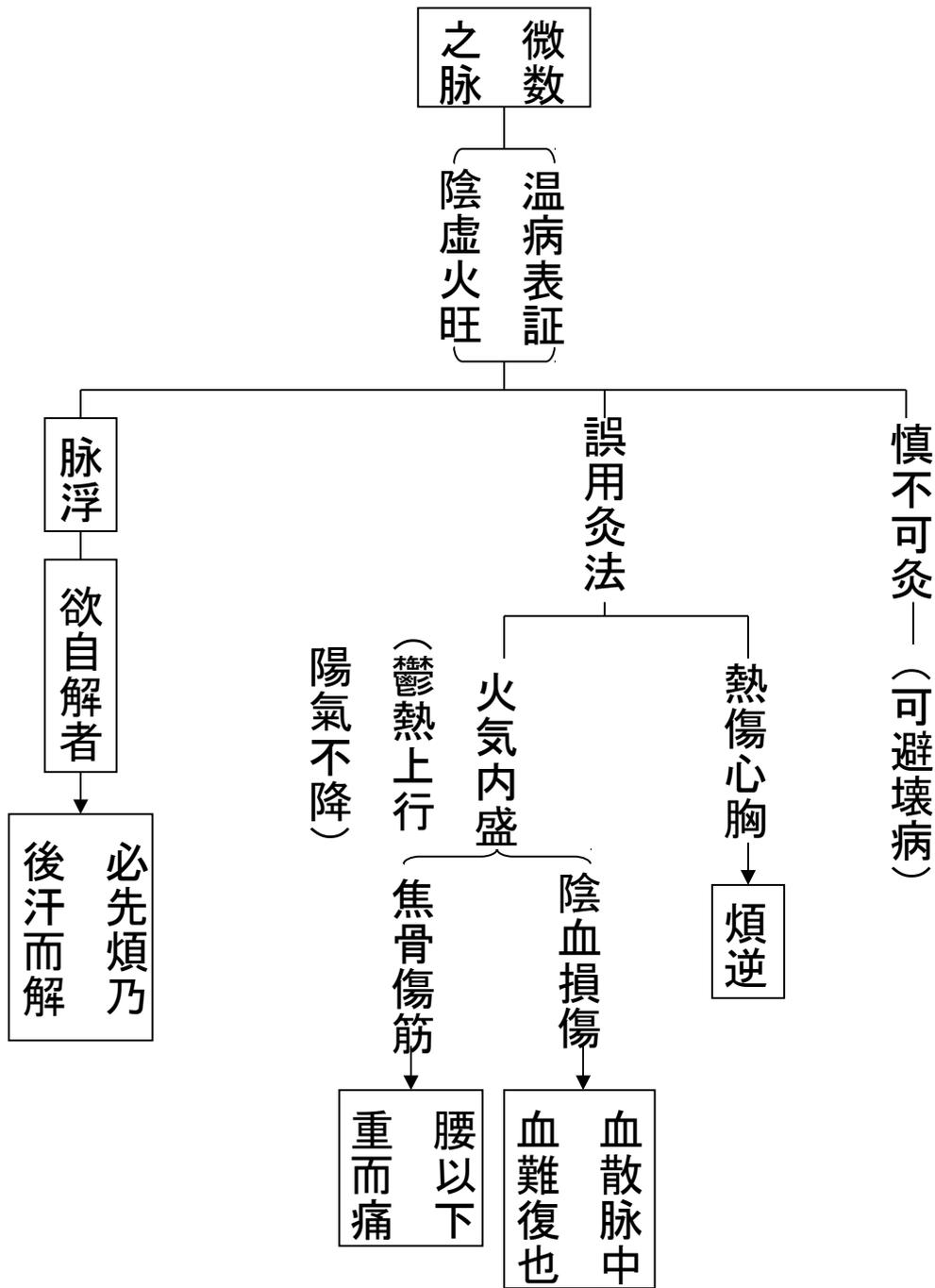


一一五条 脉浮、熱甚、而反灸之、此為實。實以虛治、因火而動、必咽燥、吐血。



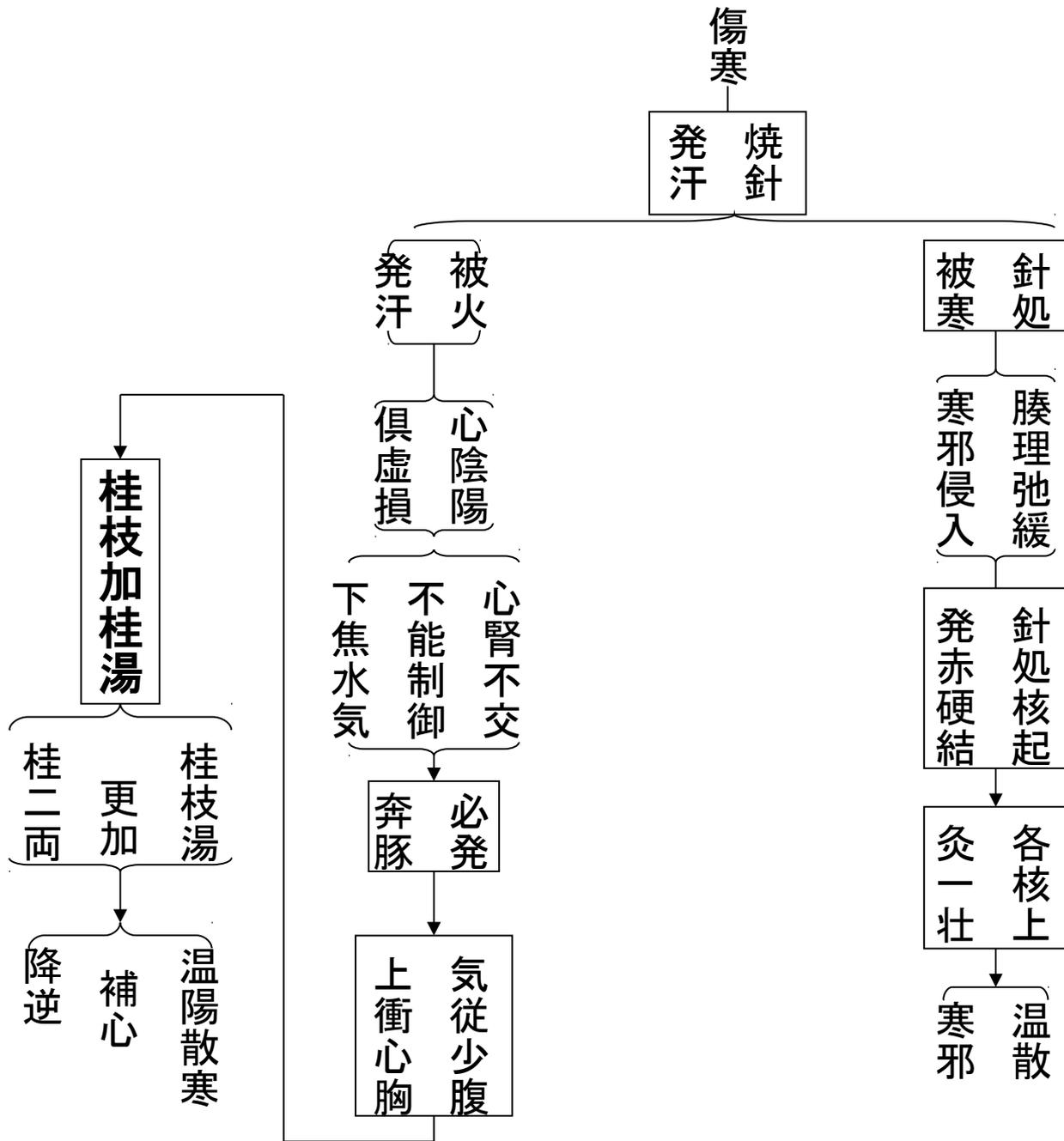
第一一六条 微数之脉、慎不可灸。因火為邪、則為煩逆、追虛逐

實、血散脉中。火氣雖微、內攻有力、焦骨傷筋、血難復也。脉浮、宜以汗解、用火灸之、邪無從出、因火而盛、病從腰以下、必重而痺、名火逆也。欲自解者、必當先煩、煩乃有汗而解。何以知之。脉浮、故知汗出解。

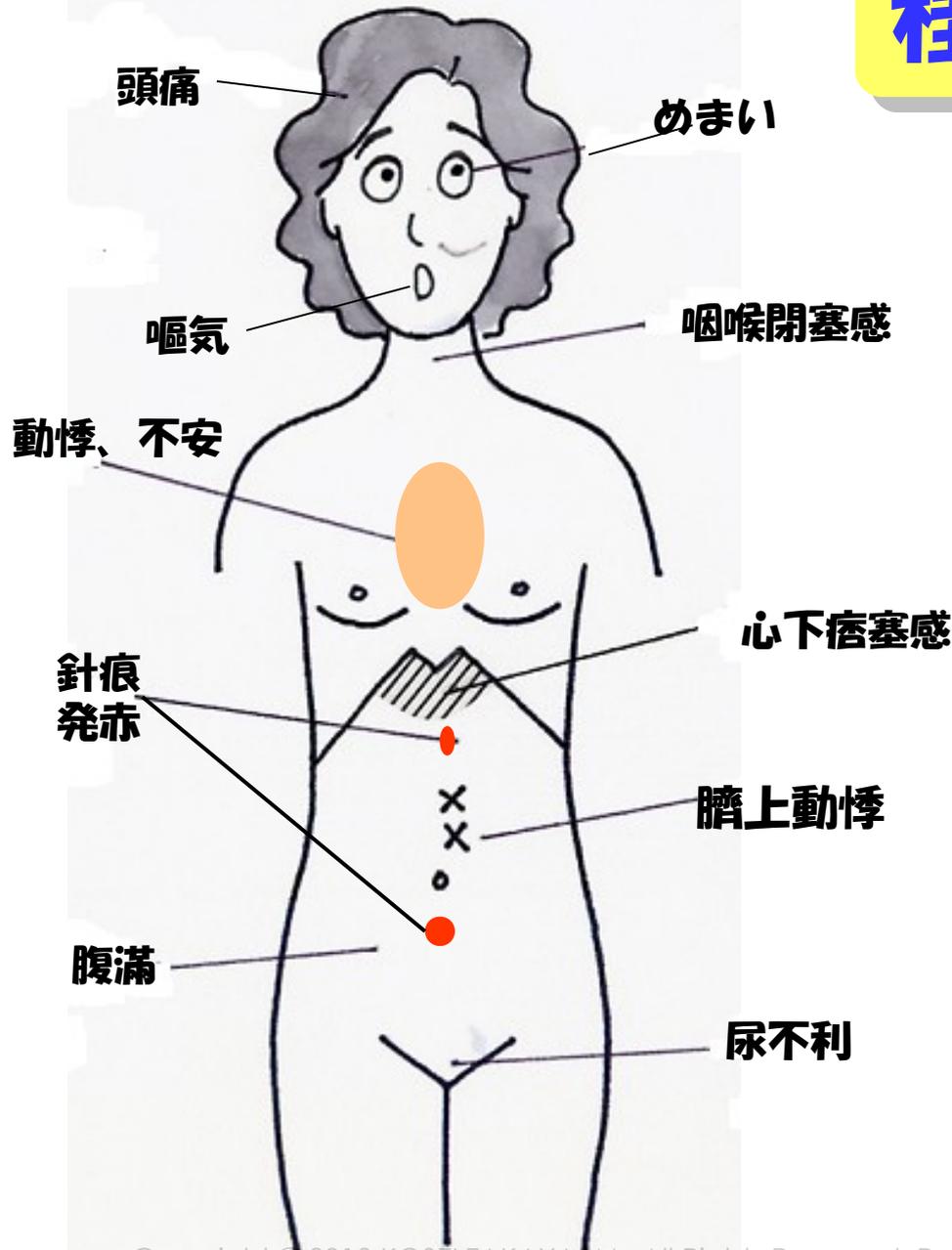


一一七条 燒針令其汗、針処被寒、核起而赤者、必發奔豚。氣從

少腹上衝心者、灸其核上各一壯、與桂枝加桂湯、更加桂二兩也。



桂枝加桂湯の証



方意

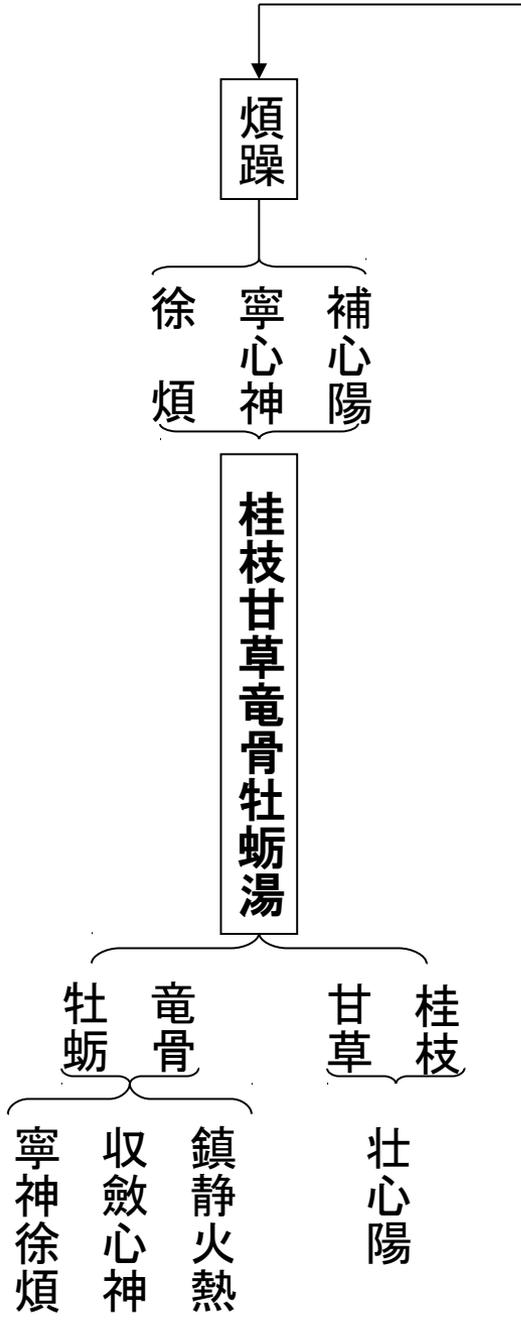
太陽病に誤って焼針を施した結果、発汗させ過ぎて、

- 1、皮膚の腠理が開いて、針をした箇所から寒邪が侵入して発赤隆起した。
- 2、心の陰血も陽気も衰えて、腎の水気（真水）を制御できなくなって、水気が下焦より上衝して奔豚を生じる。

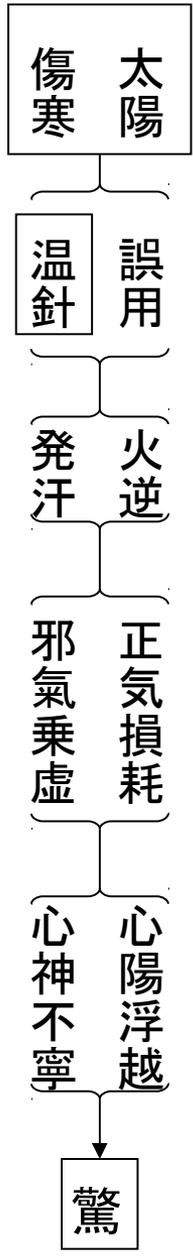
弁証のキーワード

- 1) 心陰陽両虚、心腎不交
- 2) 発作性の動悸、眩暈、不安.etc
- 3) 発汗過多や過労、などで誘発

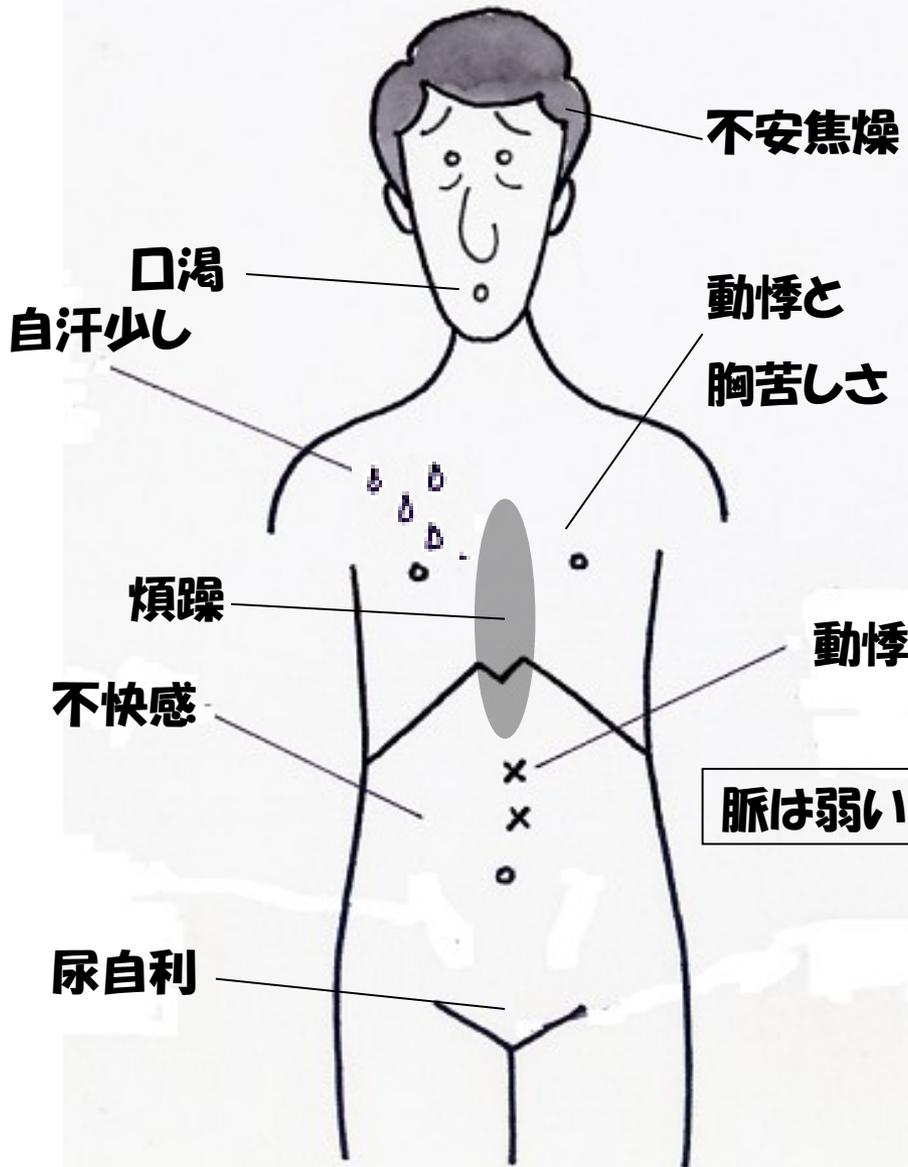
第一一八条 火逆下之、因烧針煩躁者、桂枝甘草竜骨牡蛎湯之主。



第一一九条 太陽傷寒者、加温針必驚也。



桂枝甘草竜骨牡蛎湯の証



方意

太陽病を瀉下し更に火法と二つの誤治を重ねた結果、大量の発汗と下痢で、心液を亡失して心陽が虚している処に、火邪が心に迫って心神が安寧を失い煩躁を生じたものである。

処方内容は桂枝甘草湯に竜骨牡蛎を加えており、桂枝甘草湯で心陽を養い、竜骨牡蛎で火熱を抑え、心神を収斂させて煩躁を止める。

弁証のTrias

- 1) 煩躁、不安、不眠。
- 2) 動悸、呼吸促迫。
- 3) 救逆湯証より軽い。

第一二〇条 太陽病、当悪寒発熱、今自汗出反不悪寒、発熱、

関上脉細数者、以医吐之過也。一二日吐之者、腹
中飢、口不能食。三四日吐之者、不喜糜粥、欲食
冷食、朝食暮吐、以医吐之所致也、此為小逆。

太陽病

誤用
吐法

損傷胃津
陰虛内熱

今反自汗出
発熱不悪寒
関上脉細数



一二日吐之者

胃陰損傷軽度

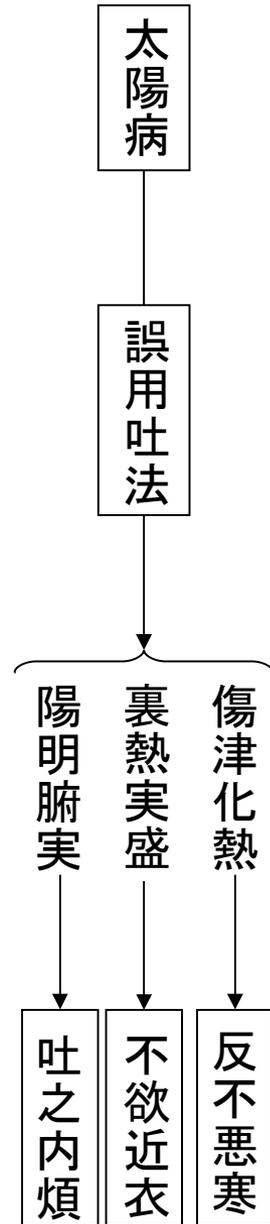
腹中飢而
口不能食

三四日吐之者

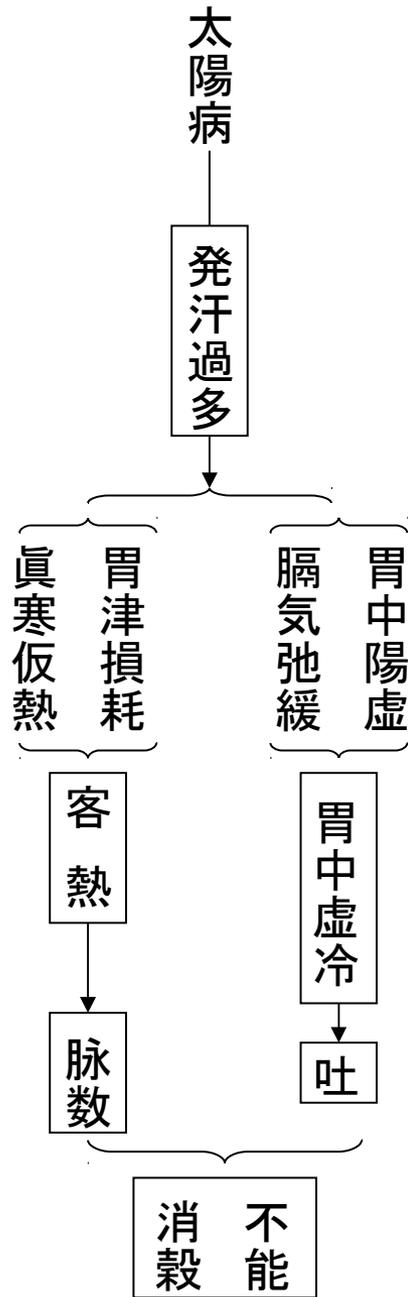
胃陰損傷重度
胃燥乏津虚火内生
胃陽不足不能納食

朝食暮吐
欲食冷食
不喜糜粥

第一二二条 太陽病吐之、但太陽病当惡寒、今反不惡寒、不欲
 近衣、此為吐之内煩也。



第一二三条 病人脉数。数为熱、当消穀引食。而反吐者、此以
 発汗、令陽氣微、膈氣虚、脉乃数也。数为客熱、不
 能消穀。以胃中虚冷、故吐也。



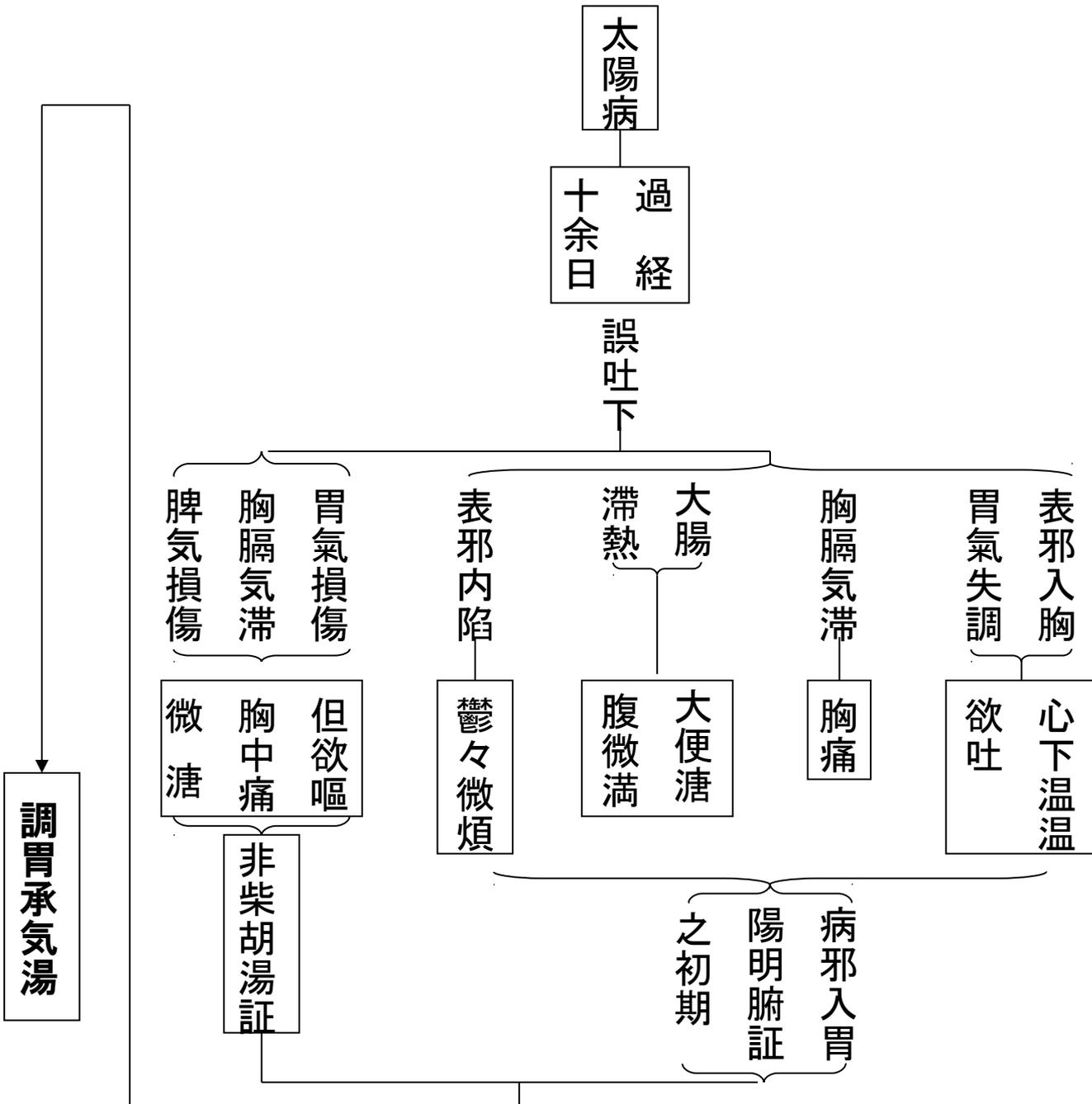
第一二三條 太陽病、過經十余日、心下温温欲吐而胸中痛、大

便反澹、腹微滿、鬱鬱微煩。先此時自極吐下者、與

調胃承氣湯。若不爾者、不可與。

但欲嘔、胸中痛、微澹者、此非柴胡湯証、以嘔故知

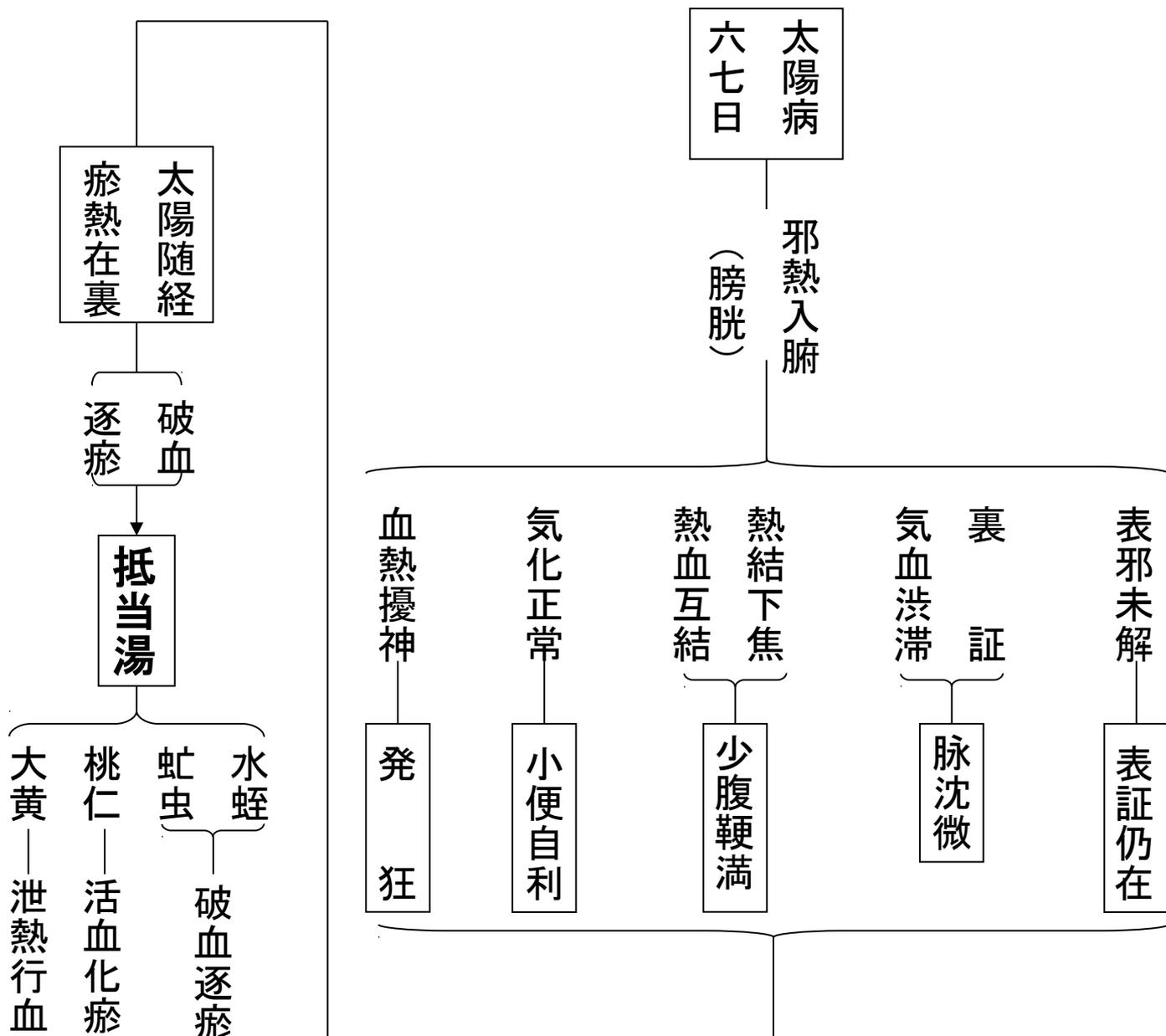
極吐下也。調胃承氣湯。



第一二四条 太陽病、六七日表証仍在、脉微而沈、反不結胸。其

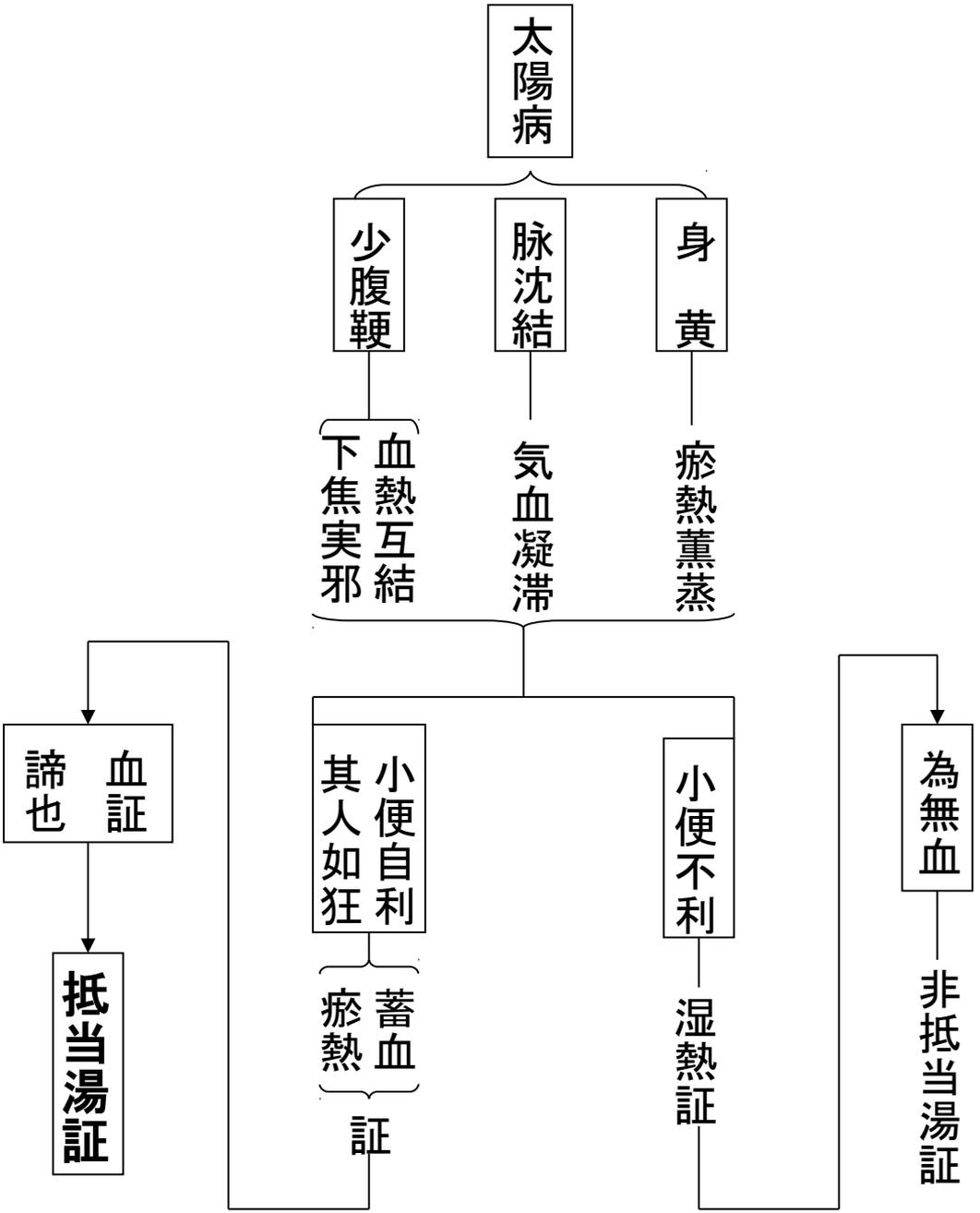
人發狂者、以熱在下焦、少腹当鞭滿、小便自利者、
下血乃愈。所以然者、以太陽髓經、瘀熱在裏故也。

抵当湯主之。

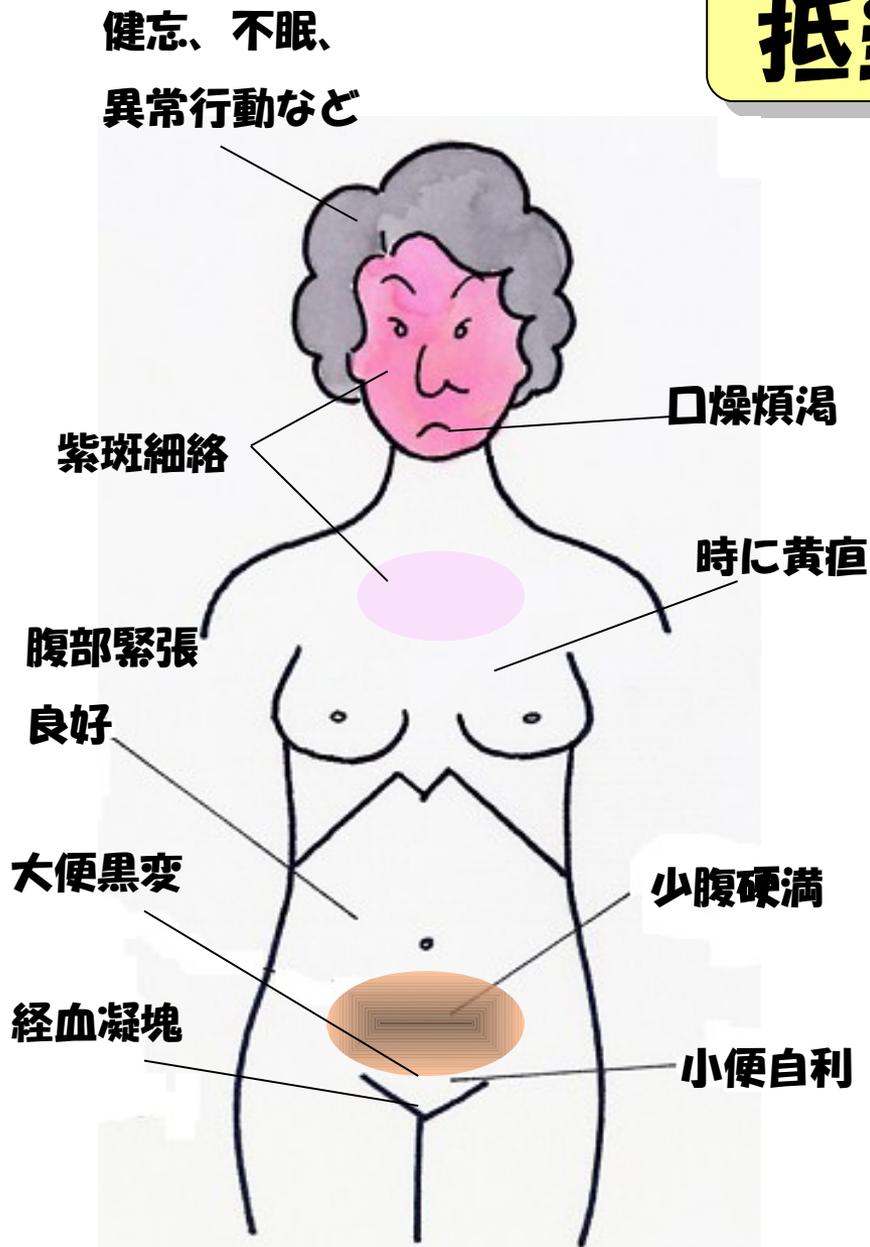


第一二五条 太陽病、身黄、脉沈結、少腹鞭、小便不利者、為無

血也。小便自利、其人如狂者、血証諦也、抵当湯主之。



抵挡湯の証*



方意

太陽病の邪は表に残存しているが、同時に太陽の腑である膀胱に入り、熱邪と下焦の血が結合して下焦蓄血証を呈したもので、強い瘀血が特徴。

一般症状：瘀血の証候に健忘、不眠等の精神神経症状を伴う。

舌証：舌質瘀血斑、舌下血絡。

脉象：沈微。

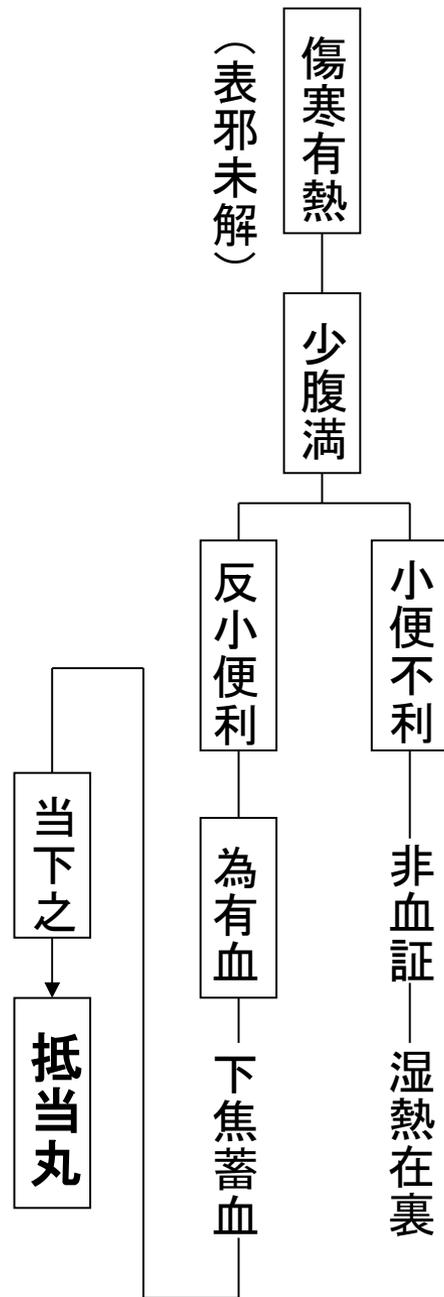
腹証：少腹硬満。

処方

水蛭1.0、蟲蟲1.0、桃仁1.0、大黃3.0

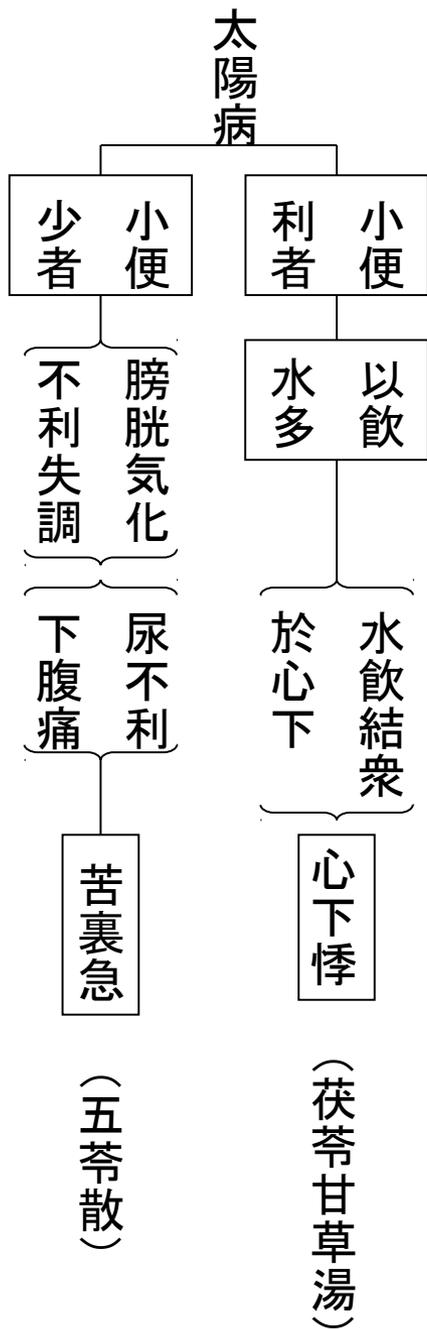
抵挡丸は本方を丸薬とし軽症に用う。

第一二六条 傷寒有熱、少腹滿、心下悸、小便不利、今反利者、為有血也、當下之、不可余藥、宜抵当丸。



第一二七条 太陽病、小便利者、以飲水多、必心下悸。

小便少者、必苦裏急也。



太陽腑証の鑑別診断

処方名	証名	病機	主症状	備考
五苓散	下焦蓄水証	膀胱気化失調	尿不利 水腫、水逆	気分証
桃核承気湯	下焦蓄血証	血熱互血 邪熱旺盛	太陽病不解 少腹急結 如狂	血分証
抵挡湯	下焦蓄血証	血熱互結 瘀血顕著	表証仍在 少腹硬満 発狂	血分証
抵挡丸	下焦蓄結証	下焦瘀血 熱、瘀血俱軽	少腹満 小便自利	血分証